備前邑久窯跡群出土陶棺と鴟尾に関する覚書

亀　田　修　一

―論　文　要　旨―

備前邑久窯跡群では，須恵器以外に陶棺や鴟尾を生産している。

陶棺は「須恵質切妻家形陶棺」が有名で，７世紀末～８世紀前半に生産されていたことが確認でき，一部異なる特徴のものの生産が７世紀前半まで遡る可能性が確認できた。窯跡は各小地域にあり，供給先は備前邑久窯跡群周辺の古墳や墳墓であることが推測できた。また，備前邑久窯跡群で生産された陶棺は，遺体を伸展葬で納めることができる大型，小さい身体の人物用や小児用，または火葬骨用の中型，火葬骨用の小型に区分でき，大多数が大型と中型であること，それらが７世紀末～８世紀前半に生産・供給されたことが確認できた。これによってこの地域における火葬の始まりの早さ，横穴式石室墳築造が奈良時代まで続きそうであることなどが改めて確認できた。

一方，鴟尾は７世紀末～８世紀前半に生産され，地元邑久郡の古代寺院とともに備前国府周辺の古代寺院，さらに遠く大和や摂津，そして讃岐にも供給されていたことが改めて確認できた。鴟尾の生産に関しては，基本的に寒風窯跡群を中心になされていることが確認でき，一部備前市佐山地域でも生産されていることが推測できた。

このように陶棺と鴟尾の生産のあり方に違いが存在することは，その供給先・供給体制の違いに起因すると推測できた。

キーワード：陶棺，鴟尾，備前，邑久窯跡群，須恵器，窯跡，宮都への供給，火葬

１．はじめに

備前邑久窯跡群は岡山県南東部に位置する須恵器窯跡群である。６世紀中頃から12世紀までの窯跡が約130基確認されているが，発掘調査された窯跡は12基しかない。そのため須恵器研究は基本的に採集資料によってなされてきた[1]。

ただ，近年少ないながらも発掘調査が進み，その実体の一部が徐々に明らかになり始めた。筆者も不十分ながらこれらの発掘調査の成果を加えて備前邑久窯跡群出土須恵器について簡単な整理を行ってきた[2]。

小稿ではこれまで扱ってこなかった陶棺と鴟尾について簡単に整理しようとするものである。まず備前邑久窯跡群で出土した陶棺とこの周辺地域の古墳などで出土した陶棺を集成・検討する。次に同様に備前邑久窯跡群出土の鴟尾を集成・検討し，ついでこの備前邑久窯跡群で生産されたと推測されている鴟尾の供給先などについて検討する。最後に，これまでの須恵器の生産と流通をふまえ，陶棺と鴟尾の生産と流通のあり方についてまとめたい。

２．陶棺

（１）窯跡出土資料

①寒風窯跡群（図２）（瀬戸内市2009，間壁1982c）

瀬戸内市牛窓町長浜に位置する。古く1929年に時實黙水が本窯跡群の北西部に位置する１号窯跡の灰原を発掘調査した。1978年，「寒風陶芸の里」構想に関連して，寒風古窯址群緊急調査委員会が一部発掘調査を行った（岡山県1978）。そして2005～2008年に牛窓町教育委員会が史跡整備に伴って発掘調査した（瀬戸内市2009）。

これらの調査によって，７世紀初め頃から８世紀初め頃の窯跡が合計５基あることが確認された。それぞれの窯跡の時期は１－Ⅲ号窯跡：７世紀初め～前半，１－Ⅱ号窯跡：７世紀前半～中葉，２号窯跡：７世紀中葉～８世紀初め，１－Ⅰ号窯跡：７世紀末～８世紀初め，３号窯跡：７世紀末～８世紀初めと考えられている。

陶棺は，2005～2008年の発掘調査において１－Ⅲ号窯跡上層Ｔ18土坑１（図２－１），１－Ⅱ号窯跡上層Ｔ32埋土（図２－２），同Ｔ19埋土（図２－３），１－Ⅰ号窯跡Ｔ31焚き口部（図２－４）で出土し，古く時實黙水が調査・採集したものがある（図２－５～10）。また，２号窯跡でも出土したとされているが，2005～2008年の調査では出土せず，これに関しては不明である。

また，１－Ⅲ号窯跡上層Ｔ18土坑１資料と１－Ⅱ号窯跡上層Ｔ32・Ｔ19埋土出土資料はこれらの窯跡に伴うものではなく，１－Ⅰ号窯跡資料が移動した可能性が推測されている。

つまり，寒風窯跡群出土の陶棺に関しては，基本的に１－Ⅰ号窯跡で生産された可能性が推測されるのである。そうすると，１－Ⅰ号窯跡で出土する須恵器は７世紀末～８世紀初めのもので，陶棺もこの時期のものと推測されることになる。

以下，瀬戸内市2009の報告書の成果によりながら説明する。

図２－１は，１－Ⅲ号窯跡上層Ｔ18土坑１出土の家形陶棺の箱形の身の長軸側面で，小口側面が一部残っている。当初１個体で製作され，２分割されたものである。身上部と小口側側面に幅6.4～6.8cmの凸帯を作り，上部の凸帯に小円孔が開けられている。底部外面には直径13.8cmの円形の脚がつけられた痕跡が２ヵ所みられる。脚は格子タタキの上に貼り付けられている。脚は２つの痕跡からもともと４本あったものと推測されている。

調整は，身の外面・内面上部・上端部，底部外面に４×５mmの斜格子タタキの痕跡が残る。身内面下部は板状工具によるナデらしき痕跡が残る。身の側面の長さは86.4cmあり，２分割であるので２倍すると，172.8cmになる。高さは43.2cm，底面の厚さは3.6cm，側面の厚さは2.8cm，側面上端部の幅は3.6cmである。色調は内外面ともに灰白色で，焼成はやや不良である。

この陶棺の大きさから遺体はそのまま納められたものと推測される。「大」のグループである[3]。

図２－２は１－Ⅱ号窯跡上層Ｔ32埋土出土の身の側面の破片である。身の上端部から底部の折れ曲がり部分まで残り，その高さは47.5cmである。厚さは4.5～5.7cmである。外面の上端部には幅6.5cm，厚さ0.5～0.7cmの凸帯がある。外側面は粘土板部が横方向のヘラケズリ，側面は横方向のヘラケズリ後，縦方向にヘラケズリしている。内面は縦方向にヘラケズリ後，上部は横方向にナデている。色調は灰白色で，焼成はやや不良である。

全体の大きさは分からないが，側面の高さが47.5cmであり，前述の１－Ⅲ号窯跡上層Ｔ18土坑１資料の側面の高さが43.2cmであることから，ほぼ類似した大きさと推測され，「大」のグループであろう。

図２－３は１－Ⅱ号窯跡上層Ｔ19埋土出土の底部と脚部の破片である。この脚は円筒形ではなく，方柱形を呈している。作り方は，まず上部径約12cm，高さ約14.5cmの円筒を内面に同心円文当て具を当て，外面を格子状タタキ板で叩いて作り，その後，外側に三角柱状の粘土を４つ貼り付け，方柱状に板ナデして仕上げている。こうして上部幅12.0～12.5cm，下部幅13.0～14.5cm，高さ14.5～15.0cmの方柱形の脚ができる。身の底部外面は平行タタキ（？）の上に脚部が付けられている。身の内部はヘラ状工具によるヘラケズリとヨコナデ，厚さは3.8～4.2cmである。色調は灰白色で，焼成はやや良好で

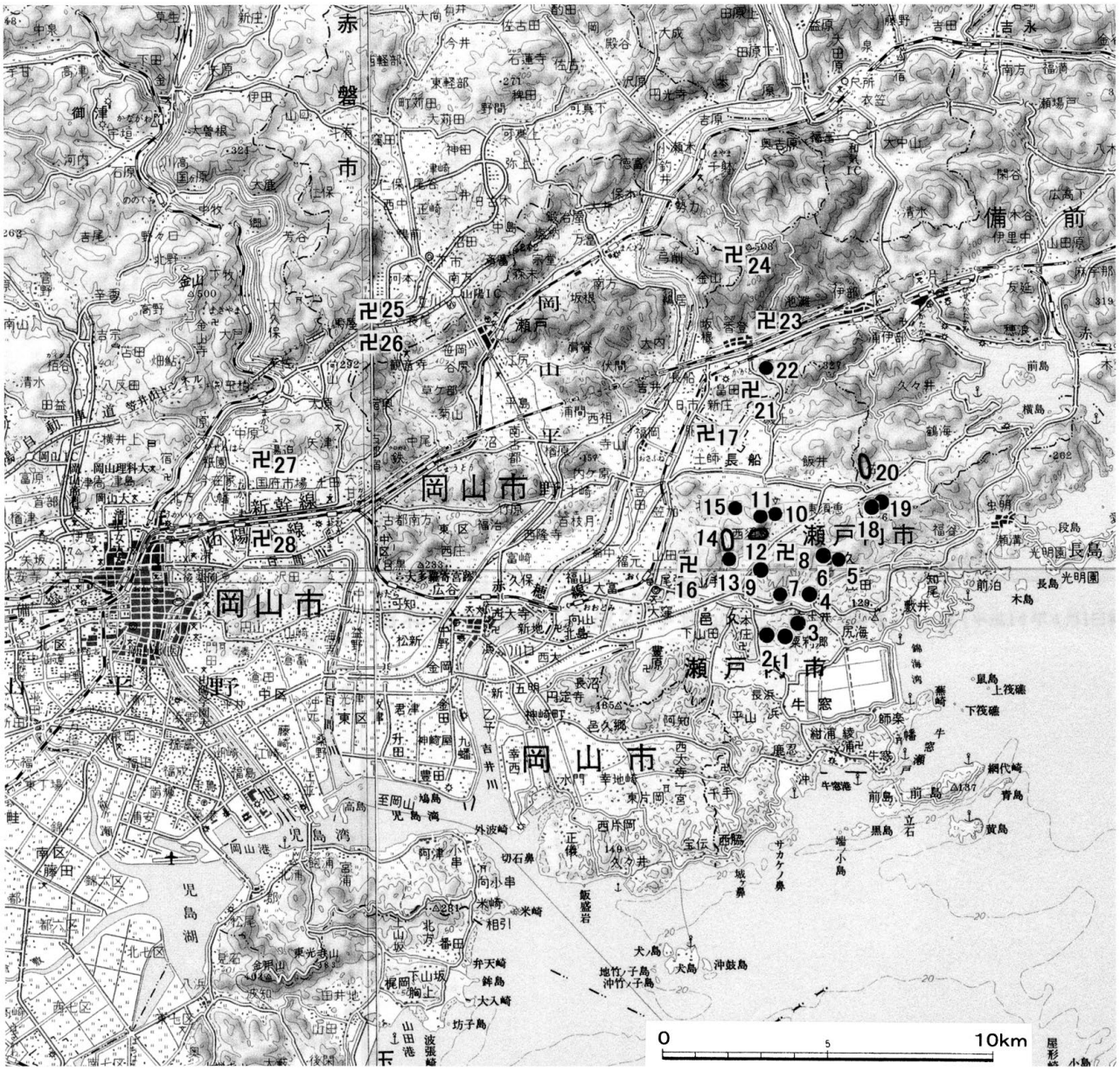

図１　関連遺跡位置図（1/200,000）

（国土地理院発行20万分の１地勢図「姫路」「徳島」「高梁」「岡山及丸亀」一部改変）

１．寒風窯跡群・寒風古墳　２．古市村窯跡　３．切明窯跡　４．新林（宮嶋）窯跡　５．サザラシ１号墳　６．新山２号窯跡
７．本庄佐井田口遺跡　８．須恵廃寺　９．花尻南窯跡群　10．本坊山古墳（山崎７号墳）　11．桂山十二ヶ屺５号墳
12．西山・札崎古墳群　13．水落古墳　14．亀ヶ原古墳群　15．蟋４号墳　16．半田廃寺（尾張廃寺）　17．服部廃寺
18．佐山新池１号窯跡　19．大城谷北窯跡・大城谷南窯跡・大城池窯跡　20．惣田奥古墳群　21．寺奥廃寺　22．新羅古墳
23．香登廃寺　24．熊山遺跡　25．備前国分寺跡　26．備前国分尼寺跡　27．賞田廃寺　28．幡多廃寺

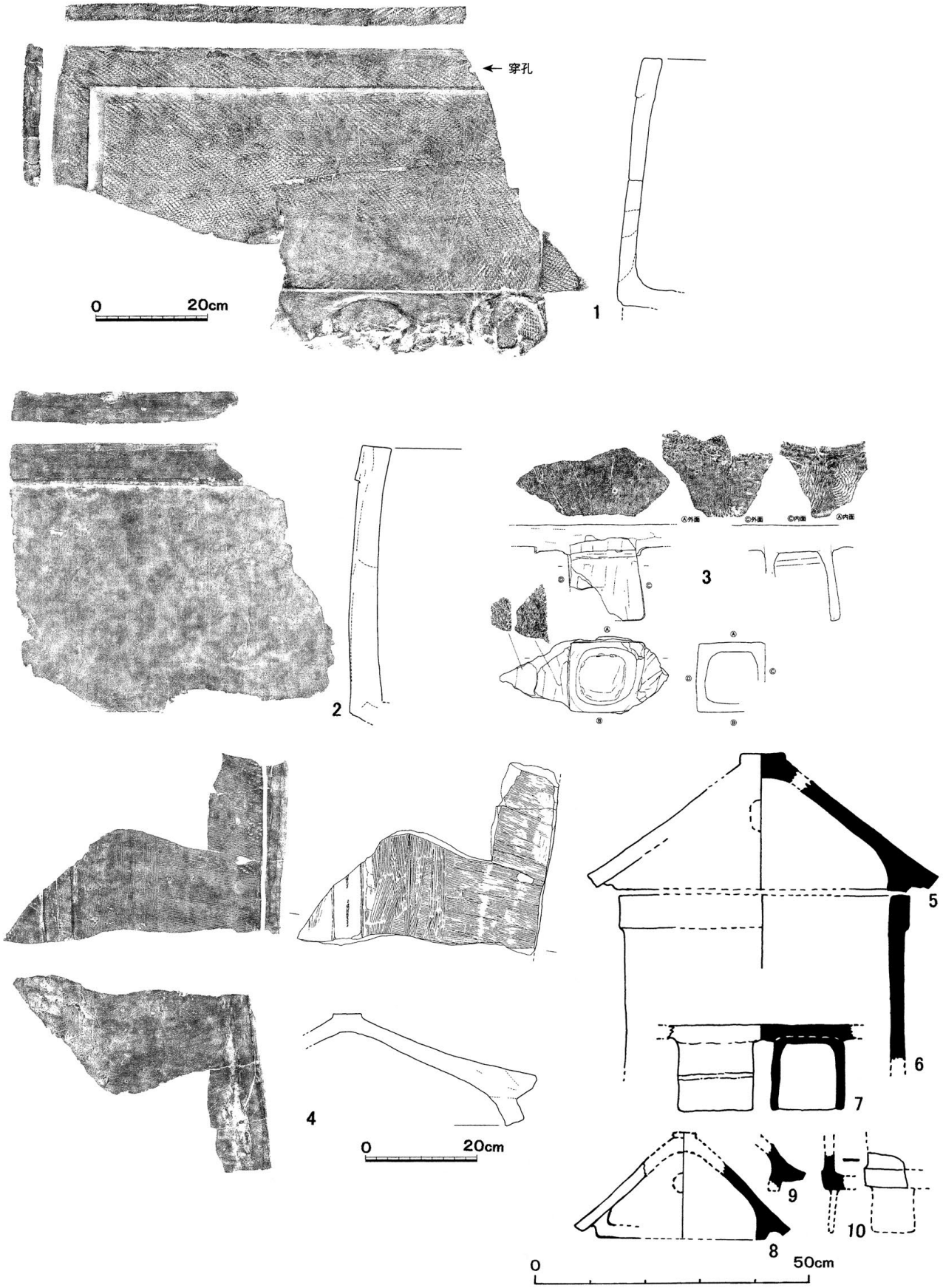

図２　寒風窯跡群出土陶棺（1/10）

１．寒風１－Ⅲ号窯跡　２・３．寒風１－Ⅱ号窯跡　４．寒風１－Ⅰ号窯跡　５～10．寒風窯跡群

ある。

図２－４は，１－Ⅰ号窯跡Ｔ31焚き口部で出土した屋根部である。妻側端部は残らないが，これまでの寒風１号窯跡群出土資料から，切妻家形陶棺と推測される。上部には幅５cm，高さ約６mmの棟が表現され，屋根の斜面部はやや内反り気味になっている。軒先は横方向にヘラケズリされ，軒の内側には身の上端部にのる平坦部が作られている。その厚さは約3.6cmである。この身がのる部分の大きさ，つまり推測される身の幅は約63cm，屋根の復元幅約68cmである。

調整は，天井部外面軒近くに格子タタキの痕跡が見え，その上にタテのハケ目，棟近くにはヨコのハケ目が見える。棟の上面ははっきりしないが，タタキのあとナデられ，その中央部に１条の紐状圧痕が見える。内面は横方向のヘラケズリとナデが見える。色調は外面が黄灰色，内面が灰白色，焼成は良好である。

ここでは図示していないが，身の上部破片が出土しており，幅約6.5cm，厚さ0.6～0.7cmの上部の凸帯には格子タタキが残り，体部外面はヘラケズリされている。内面の調整は摩滅してよくわからない。

図２－５～10は，時實黙水が調査・採集した資料である。詳細は不明であるが，間壁1982cによれば須恵質切妻家形陶棺で，屋根の妻部に円孔が開けられたものが表現されている。５～７は身の幅約50cmで，図２－１～４と類似した大きさで，「大」に属すると思われる。８～10はそれらよりやや小型で，８の身幅は約29cmあり，後述する惣田奥４号墳例に近く，「中」に属するようである。

以上，述べてきたように寒風窯跡群出土陶棺は１－Ⅰ号窯跡で焼成されたものと推測される。

②古市村窯跡（亀田1997c）

瀬戸内市牛窓町長浜に位置する。寒風窯跡群の西約800mに位置し，単独に築かれたようである。すべて表面採集資料で，７世紀末～８世紀初め頃の少数の須恵器とともに陶棺の破片が採集されている。

陶棺（図３－１）は身の上部の破片で，上部に幅約3.9cmの斜格子タタキを残す凸帯がある。体部は格子タタキの上に横ハケがなされている。内面はタテ・ヨコのハケ目とナデがみられる。口縁部は平らで，ナデである。体部の厚さは3.6cmである。

③天堤窯跡（西川・間壁1970，伊藤1982，亀田2006c）

瀬戸内市邑久町尻海に位置する。採集資料のみで，６世紀末～７世紀前半のものと，７世紀末～８世紀前半の須恵器がみられる。陶棺に関しては，伊藤1982のp.52に掲載され，その註４に「いずれも，時實黙水氏の採集によるもので，現在，牛窓町歴史民俗資料館に保存・展示されている。」とあるが，筆者は確認できていない。

④新山２号窯跡（亀田2006b）

瀬戸内市邑久町尻海に位置する。６世紀末～７世紀前半の須恵器とともに陶棺と推測される破片が２点採集されている（図３－２・３）。

２はタテヨコ約14cm，厚さ１～２cmの全面ナデ仕上げの無文の破片で，直径１cm弱の小円孔が７個開けられている。これが陶棺であるのか不確実ではあるが，ほかに形が想定できず，ひとまず陶棺の破片としている。

３は陶棺の蓋の一部と推測しているもので，体部の厚さは２cm弱，天井部の厚さは約３cmである。

これらの陶棺と推測しているものは，少なくとも備前邑久窯跡群やその周辺の古墳で出土している須恵質切妻家形陶棺とは様相が異なり，もし陶棺で良ければ，このような陶棺も生産していたことになる。なお，このような薄手の陶棺の類例を探すと赤磐市岩田８号墳に箱形の特異な形態のものがある。板状の蓋や体部の厚さが約1.8～2.0cmと多少近いが，蓋に竹管文は見られるものの円孔は見られない（神原1976）。

なお，この新山２号窯跡の東北東約100mにサザラシ１号墳があり，この周辺の窯跡群との関わりが想定されているが，そこで陶棺片を１点採集した（図３－13）。ただこれは須恵質切妻家形陶棺の屋根の棟付近の破片で，外面は全体に斜格子タタキが施されており，備前邑久窯跡群・周辺古墳群出土陶棺と同じグループのものである。

この新山２号窯跡の陶棺と推測されるものが陶棺で良ければ，備前邑久窯跡群で確認できる最古段階の陶棺となる。

⑤庄田工田窯跡（亀田2006e，亀田ほか2021）

瀬戸内市邑久町庄田に位置する。詳細は不明であるが，Ａ～Ｃの３地点で須恵器が採集され，陶棺が採集されているとされている。2018～2021年に岡山理科大学考古学研究室が８世紀前半の窯跡であるＢ地点を発掘調査しているが，陶棺は出土していない（亀田ほか2021）。

このほかのＡ地点とＣ地点は現在ではほとんど遺物が採集できず，よくわからない。

⑥新林（宮嶺）窯跡（図３－４）（伊藤1974，亀田2006f）

瀬戸内市邑久町尻海に位置し，1973年に東備西播有料道路（岡山ブルーライン）建設に伴って発掘調査された。推定全長約12m，最大幅2.20mの地下式登窯である。

床面は少なくとも２面あり，７世紀前半～中葉のものと，７世紀末～８世紀前半の須恵器が出土している。これらとともに寄棟（四注）式家形陶棺（図３－４），鳥の羽根を表現した鴟尾（図７－10）が出土している。

陶棺は須恵質寄棟（四注）家形陶棺の屋根部の破片である。屋根の幅は復元すると約70cmになる。身と重なる部分の幅は約55cmである。長さは分からないが，幅は前述の寒風窯跡群の「大」資料と近い。

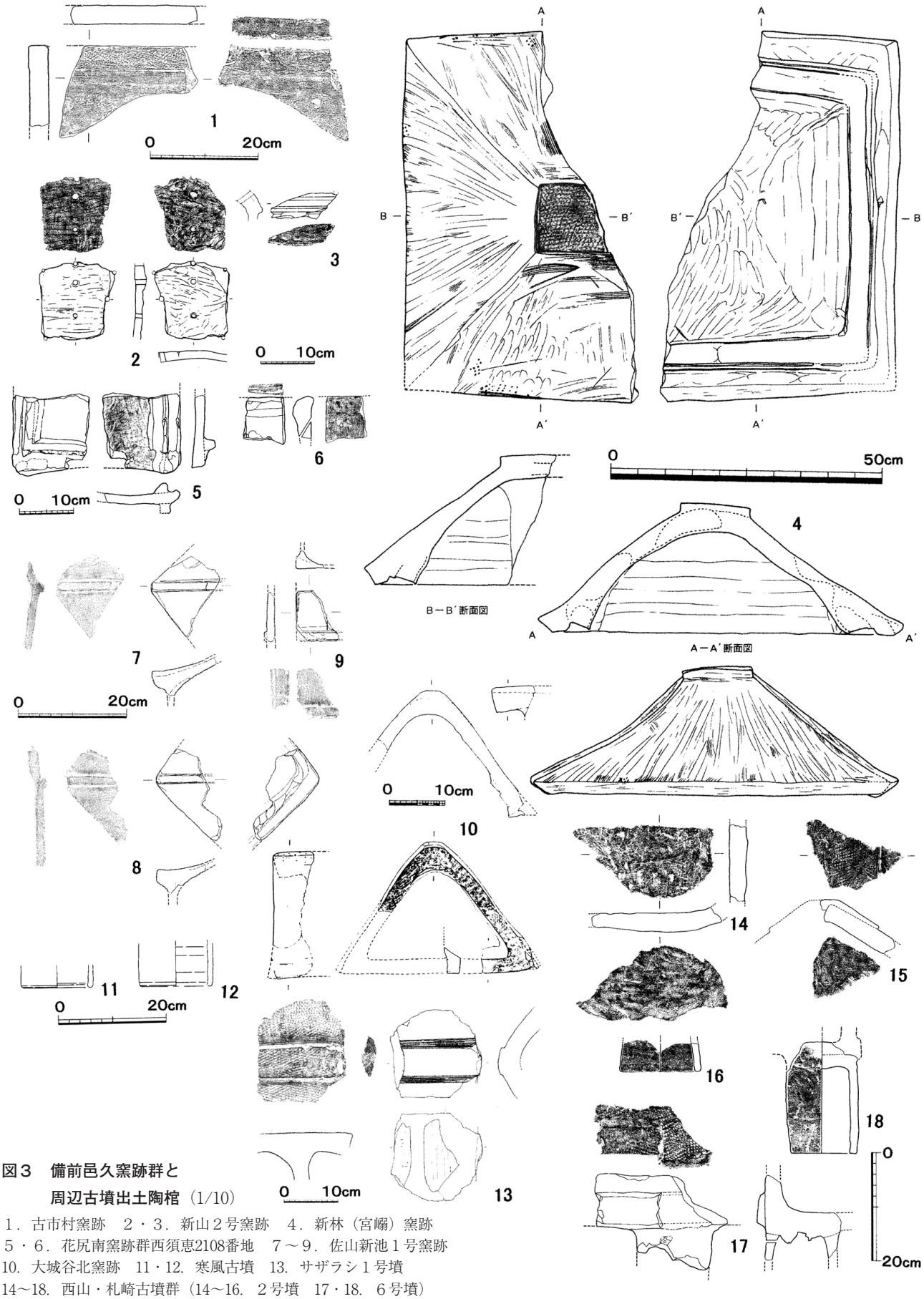

図３　備前邑久窯跡群と周辺古墳出土陶棺（1/10）

１．古市村窯跡　２・３．新山２号窯跡　４．新林（宮嶋）窯跡
５・６．花尻南窯跡群西須恵2108番地　７～９．佐山新池１号窯跡
10．大城谷北窯跡　11・12．寒風古墳　13．サザラシ１号墳
14～18．西山・札崎古墳群（14～16．２号墳　17・18．６号墳）

備前邑久窯跡群およびその周辺の古墳で出土する陶棺には基本的に寄棟陶棺はなく，ほかに長船町磯上資料を確認しているだけである。ただ，磯上資料は長さ84cm，幅42cmの「中」グループである。

幅15cmの棟部には斜格子タタキが残る。屋根の外面は一部タタキの痕跡を残すが，ほとんどナデで消されており，内面はナデが残るのみである。厚さは３～４cmである。

時期は共伴する須恵器からは７世紀前半～８世紀前半となる。

⑦本庄佐井田口遺跡（邑久町2001）

瀬戸内市邑久町本庄の丘陵谷部に須恵器が散布し，その畑の石垣に挟まった状況で採集されている。北東約100mの西向き斜面に本庄佐井田口窯跡があり，それとの関係が推測されている。

須恵質切妻家形陶棺の屋根部の破片で，ヘラケズリとヘラナデで調整されている。時期はよくわからない。

⑧亀ヶ原１号窯跡（近藤1955，西川・間壁1970，池田1998e）

瀬戸内市長船町西須恵に位置する。窯体がそのまま残っている窯跡として有名である。西川・間壁1970のp.299に「陶棺も焼いていたとみられる」とあるが，遺物は現存せず，よくわからない。採集されている須恵器は７世紀前半のものがある。

⑨花尻南窯跡群西須恵2108番地（池田1998c）

瀬戸内市長船町西須恵に位置する。1988年圃場整備に先立ち，発掘調査された。６世紀末から８世紀前半の須恵器が出土し，陶棺が１点出土し，１点採集された。

図３－５は採集資料で，須恵質切妻家形陶棺の屋根の隅部と推測されている。外面の軒先近くに凸帯が付き，内面にも軒先近くに高さ約1.5cm，幅約1.5cmの身との合わせ部（？）が付けられている。外面は横方向にナデられ，さらに縦方向にヘラケズリされているが，部分的に同心円文当て具痕跡が残っている。妻側はヘラケズリされている。内面は軒下部分がヘラケズリされているほかはナデられている。明灰色を呈し，硬く焼け締まっている。

図３－６は発掘調査で出土した資料である。端部側の厚さが約３cm，体部の厚さが約２cmで，上端部はヨコヘラケズリ，外面はヨコナデ，内面はタテハケされている。外面から斜めに直径約４mmの孔があけられている。

この２点ともに備前邑久窯跡群および周辺の古墳で出土する陶棺とは様相が異なる。同心円文当て具痕跡がみられることは共通するが，形態的には異なる。

⑩佐山新池１号窯跡（亀田ほか2014）

備前市佐山に位置する。2010～2012年，岡山理科大学考古学研究室が発掘調査した。８世紀後半を中心とする時期の窯跡で，最大幅2.6mの半地下式登窯（長さ未確認）である。

図３－７～９は小型家形陶棺・瓦塔・骨蔵器の可能性が推測できるもので，８が表面採集，７と９が灰原の包含層で出土している。いずれも白系統の焼成で，同一個体の可能性もある。厚さが約1.5cmで，屋根は寄棟形か入母屋形である。

⑪大城池窯跡（伊藤1982）

備前市佐山に位置する。伊藤1982のp.52に掲載され，その註６に「岡山県遺跡分布調査カード（岡山県教委文化課作成管理）によれば，陶棺片が採集されている。」とある。筆者は未確認である。

⑫大城谷北窯跡（伊藤1982）

備前市佐山に位置する。1981年の分布調査において７世紀末～８世紀初め頃の須恵器とともに陶棺が採集された（図３－10）。

須恵質切妻家形陶棺の妻側に張り出した屋根の部分の破片である。棟は粘土板を１枚貼り付け，ヘラでケズリ，幅４cmの平坦面を作っている。屋根の妻側に張り出した面は格子タタキの痕跡が残っている。屋根上面に関しても同様に叩いていたと推測されるが，ヘラケズリ，ハケ目調整で部分的にしかタタキ痕跡は確認できない。青灰色を呈し，堅緻に焼成されている。

大きさは，屋根の復元幅が約36cmで厚さは2.5～３cmである。後述する惣田奥４号墳例（推定復元屋根幅約42cm）より一回り小さい「中」グループのものである。

（２）古墳出土資料

備前邑久窯跡群周辺で確認されている陶棺は表１のとおりであるが，古く採集されたものが多く，現在，その詳細について知りえないものが多い。ここでは，陶棺について，また陶棺出土古墳についてある程度情報が確認できるものを取り上げる。

①寒風古墳・中山古墳（瀬戸内市2009）

瀬戸内市牛窓町長浜，寒風１－Ⅲ号窯跡の南約65m，寒風２号窯跡の西約40mに位置する。1935年に横穴式石室が掘られ，陶棺や須恵器床が確認されている。2005年，史跡整備に伴う確認調査で発掘し，直径７m弱の円墳で，残存長3.3m，奥壁幅0.93m，入り口幅1.10mの無袖の横穴式石室が確認できた。

床面には須恵器甕の破片が敷かれ，石室内から陶棺の足が２本（図３－11・12）と７世紀末～８世紀前半の須恵器杯類が少々出土している。瀬戸内市2009のp.9に1935年調査時の陶棺出土状況の写真が掲載され，報告書では長さ約123cm，幅約60cm，脚が３列つく「中」グループの須恵質切妻家形陶棺と推測されている。脚の直径は約13cmで，非常に軟質の焼成とされている。

この陶棺の大きさがこれで良く，小児用でなければ，陶棺内での一般的な大人の伸展葬は難しく，惣田奥４号墳の陶棺と同様に火葬骨を納めた可能性が推測される。

この場合，惣田奥４号墳もそうであるが，700年の僧道昭の火葬に始まるとされる日本列島の火葬の初期の例の一つとなる可能性が出ている[(4)]。

また，石室の閉塞部には寒風窯跡群で焼成されたと推測される鴟尾片が２点出土している。

この寒風古墳の被葬者に関しては，その位置，出土遺物などから寒風窯跡群の操業などを統括した人物と推測されている。

中山古墳は，瀬戸内市牛窓町長浜，寒風古墳の南約250m，寒風窯跡群からひと山，南に越えた場所に位置する。詳細は不明であるが，須恵質陶棺が長さ約４m，奥壁幅0.8m，入り口側幅1.13mの無袖横穴式石室から出土しているとのことである。共伴須恵器から寒風窯跡群と関連する古墳と推測されている（瀬戸内市2009，pp.199-201）。

②吹尾谷の西（村上1980，間壁1982a）

瀬戸内市牛窓町牛窓に位置する。詳細は不明であるが，須恵質切妻家形陶棺で，２分割された身の半分が残り，その長さが63cm，幅48cmで，脚は３本×３列×２とされている。身の長さを２倍すると，126cmになり，伸展葬は難しい大きさになる。ただ，幅が48cmと大きく，２分割であるので，背の低い人物を伸展葬で納める棺として作った可能性もある。長さでは「中」グループになるが，幅では「大」に属するようである。

③水落古墳（亀田2006a）

瀬戸内市邑久町本庄の尾根線上に位置し，広義の亀ヶ原古墳群に属する。1956年，畑の開墾中に横穴式石室が発見され，長瀬薫が陶棺を掘りだしたとのことである。

陶棺（図４－１）は，須恵質切妻家形陶棺で，屋根は約90度の角度に作られ，棟は幅２～３cmの帯で表現されている。両方の妻には直径約３cmの円孔があけられており，一方の妻の円孔の下にヘラで「南」という文字が書かれている。また，その位置の真下にあたる身の小口部の上部にも「南」がヘラ書きされている。陶棺は，「南」の文字が南側になるように置かれていたとのことである。

調整は，全体に板状工具でナデているようである。脚はロクロ使用で，直径13cm前後，深さ約10cmの鉢状のものを身に貼り付けている。焼成は文字の反対側の妻部付近が須恵質に焼き上がっているほかは全体にやや軟質に焼かれている。色調は灰色～灰白色である。

身の上部長80cm，幅35cm，深さ20cm，屋根の長さ84cm，幅46cm，高さ22cmである。脚は５本３列で15本である。「中」グループに属する。

共伴遺物は釘か鏃の破片しかなく，詳細な時期は不明である。ただ，陶棺の大きさは長さが80cmしかなく，遺体を伸展葬で納めることは無理であり，無理やり曲げて納めることも難しそうであり，火葬して骨を納めたと考える方が素直であろう。そうすると，時期的には８世紀前半と考えるべきなのかもしれない。

また，陶棺に文字が記された例は，岡山県内では真庭市定北古墳３号陶棺（土師質亀甲形：「記」：７世紀後半：新納・尾上1995）があるだけで，県内に２例しかない。全国的にも大阪府鴨谷池窯跡（陶邑光明池234号窯跡）出土例（「伊飛寅・安留白・作」：中村1982）などがあるくらいで，極めて重要である。

備前邑久窯跡群では７世紀末～８世紀後半の数ヵ所の窯跡で文字資料が確認されており（亀田2015），この水落古墳陶棺も備前邑久窯跡群のどこかの窯で作られ，石室内の納める位置も意識して「南」の文字が書かれたものと考えられる。

④サザラシ１号墳（亀田2006b）

瀬戸内市邑久町尻海，前述の新山２号窯跡の東北東約100mに位置する。一辺15mの方墳で，長さ約6.5m，幅約1.4mの無袖横穴式石室が内部主体である。

陶棺は測量調査中に墳丘上面で採集したものである（図３－13）。須恵質切妻家形陶棺の屋根の切妻部の破片で，外面は全体に斜格子タタキが施されている。棟は幅約５cmの平坦面で表現され，屋根部の厚さは3.2cm前後である。備前邑久窯跡群・周辺古墳群出土陶棺と同じグループのものである。

ただ，新山２号窯跡出土陶棺とは形態が異なり，実態は分からないが，近くの新山１号窯跡や天堤窯跡などの製品かもしれない。

⑤本坊山古墳（山崎７号墳）（亀田・大谷1998）

瀬戸内市長船町東須恵に位置する山崎７号墳が現在，東京国立博物館に所蔵されている本坊山古墳陶棺出土古墳と考えられている。山崎７号墳は約13×11mの方墳で，内部主体は現長４m，幅約１mの無袖横穴式石室である。この古墳からの遺物は確認されていない。

陶棺（図４－２）は，須恵質切妻家形陶棺で，身の一方の小口部に複弁八葉蓮華文を２個横に並べて飾った珍しいものである。屋根の妻部に円孔はない。身は外面上端部に凸帯がつく。２分割されており，屋根は全長176cm，幅54.6～56.4cm，高さ24.6～28.0cm，棟は幅5.5cm，高さ0.9cmで，身を含めた総高は85cmである。この大きさであれば，遺体を伸展葬で納めることができ，「大」グループに属する。

蓮華文は複弁八葉蓮華文で，直径5.2cmの中房内に１＋６＋８の蓮子が配されている。中房と蓮華文の間に溝を持つ特徴がある。蓮華文の直径は12.7～13.0cmである。左右２個の蓮華文ははっきりしないが，同笵のようである。また，この蓮華文と類似したものが備前市福田の守時桂太氏の裏の畑から出土している（図４－４：梅原1952）。

この本坊山古墳が山崎７号墳で良ければ，約13×11m

の方墳に納められていたことになり，吉備の７世紀末から８世紀前半の終末期古墳としては比較的大きなもので，邑久郡の郡司クラスの墓と推測され，その棺に蓮華文を飾った陶棺を納めているということは，仏教文化との関わりも推測されることになる。

この山崎７号墳と最も近い古代寺院は南約１kmに位置する須恵廃寺であるが，須恵廃寺ではこの蓮華文と類似した瓦は出土していない（亀田1998e）。また，同じ長船町の服部廃寺（北西約３km）では比較的類似した川原寺式複弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土しているが，その複弁八葉蓮華文軒丸瓦の中房の周りには溝がなく，この点が大きく異なる（長船町1997）。

そして，北西約５mに位置する備前市福田には寺奥廃寺と呼ばれている遺跡がある。この寺奥廃寺に関しては詳細がわからないが，類似した軒丸瓦の小破片が採集されている（田代1988）。そしてこの寺奥廃寺出土の蓮華文軒丸瓦の外区文様と類似したものが備前国府関連遺跡である岡山市ハガ遺跡で出土しており（岡山市2004，草原2004），細かな比較はできていないが，中房内の蓮子は１＋６＋８で，中房の周りに溝を持つなどよく似ている。これにより，陶棺と瓦という違いはあるが，備前邑久窯跡群内の山崎７号墳と推測される本坊山古墳の陶棺と備前市福田の蓮華文軒丸瓦，そして岡山市の備前国府関連遺跡であるハガ遺跡がつながることがわかる。また，後述するが，備前邑久窯跡群の寒風窯跡群を中心とする地域で生産されたと推測される鴟尾が備前国府跡周辺の賞田廃寺や幡多廃寺で使用されていることも両地域のつながりを教えてくれている。

さらに，詳細は不明であるが，備前市福田の背戸の山古墳で屋根の妻部に蓮華文を飾った切妻家形陶棺が出土しているとのことである（守時1936，間壁1982a）。この陶棺は現在どこにあるのかわからず，確認できないが，極めて珍しい陶棺が備前邑久窯跡群周辺にもう１基あり，この古墳の所在地が備前市福田であるという点は，この福田という地域の重要性を示していると思われる。

⑥桂山十二ヶ屶５号墳（図４－５～９）（池田1998a）

瀬戸内市長船町西須恵に位置している。約7.5×約6.5mの方墳で南側に幅8.7mのテラスがつく。内部主体は長さ約４m，奥壁側での幅約1.1m，入り口側での幅0.9mの無袖横穴式石室である。

陶棺（図４－５）は，須恵質切妻家形陶棺で，２分割されたもので，身は全長167cm，幅50cm，高さ38cm，脚は直径18cm，高さ17cmの円柱形で，３本×２列×２で12本である。屋根は一部しか残っていないが，高さ19cmである。身の脚を含めた高さは56cm，屋根を含めた高さ75cmである。身の上部，蓋と接する部分は基本的には平らであるが，中央部はわずかに溝状を呈している。身の外面は上端部と下端部に幅約４cmの凸帯がつく。屋根の妻部には円孔はない。蓋身とも内外面ともにヘラケズリ（？）され，タタキなどの明確な痕跡は見ることができない。焼成は良好なところと不十分なところがある。

この大きさであれば，遺体を伸展葬で納めることは可能であり，「大」グループに属する。

共伴遺物は７世紀末～８世紀前半の須恵器杯類があり，石室の内外から窯壁が十数点出土している。

⑦西山・札崎古墳群（図３－14～18）（亀田1998c）

瀬戸内市長船町西須恵に位置する。桂山十二ヶ屶５号墳の南西700m～1,000mの範囲に位置する。古墳は９基確認されており，そのうちの２号墳，６号墳で陶棺が確認されている。また，どの古墳かは特定できないが，２基の古墳から陶棺が出土している。

２号墳は直径６mの円墳で，長さ約3.5mの横穴式石室から須恵質家形陶棺の破片が採集されている（図３－14～16）。屋根，身，脚の破片があり，屋根の外面には斜格子タタキの痕跡が見える。屋根の内面や身の内外面はナデのようである。脚の底径は15cmである。

６号墳は墳丘の規模，石室の状況など詳細は不明であるが，須恵質陶棺の脚部が採集されている（図３－17・18）。17は身の下部と脚の上部で，身の外面下部には凸帯が貼り付けられ，凸帯の下に格子タタキの痕跡が見える。18の脚は最大径13.2cm，高さ16.8cmである。

これらの古墳の時期は不明である。

また，札崎で陶製無文当て具が２点出土している。近畿地方で時々見られる陶栓の可能性もないことはないが，これまで備前邑久窯跡群周辺では陶栓を使用した陶棺は確認されておらず，須恵器作りに使用した無文当て具と考えておく（亀田2020a）。この考えが正しければ，この古墳群に須恵器作りに関わった人物が埋葬されている可能性が推測できると考えている。

⑧亀ヶ原古墳群（図５－１～16）（池田1998b）

瀬戸内市長船町西須恵，西山・札崎古墳群から西に亥子田古墳群を挟んで位置する。31基の古墳があり，亀ヶ原大塚古墳（６世紀後半，墳長40m：江見1998b），金鶏塚古墳（６世紀前半，墳長約35m：江見1998a）という前方後円墳が２基あるが，これら以外は基本的に小円墳である。また，前述の水落古墳も亀ヶ原古墳群の南側に位置し，広義の亀ヶ原古墳群に含むことができる。

陶棺は以下の古墳で出土している。

亀ヶ原７号墳　直径約8.5mの円墳で，長さ約5.4m，幅約0.7mの無袖横穴式石室を内部主体としている。

陶棺は屋根，身，脚が採集されている。屋根（図５－１・２）は幅7.8cmの棟を持ち，外面は斜格子タタキの上に直線や曲線の櫛描き文が描かれている。棟に直交してM字状の凸帯が貼り付けられている。内面には同心円文が残る。図５－４は，身の上部で，上縁に幅4.2cmの

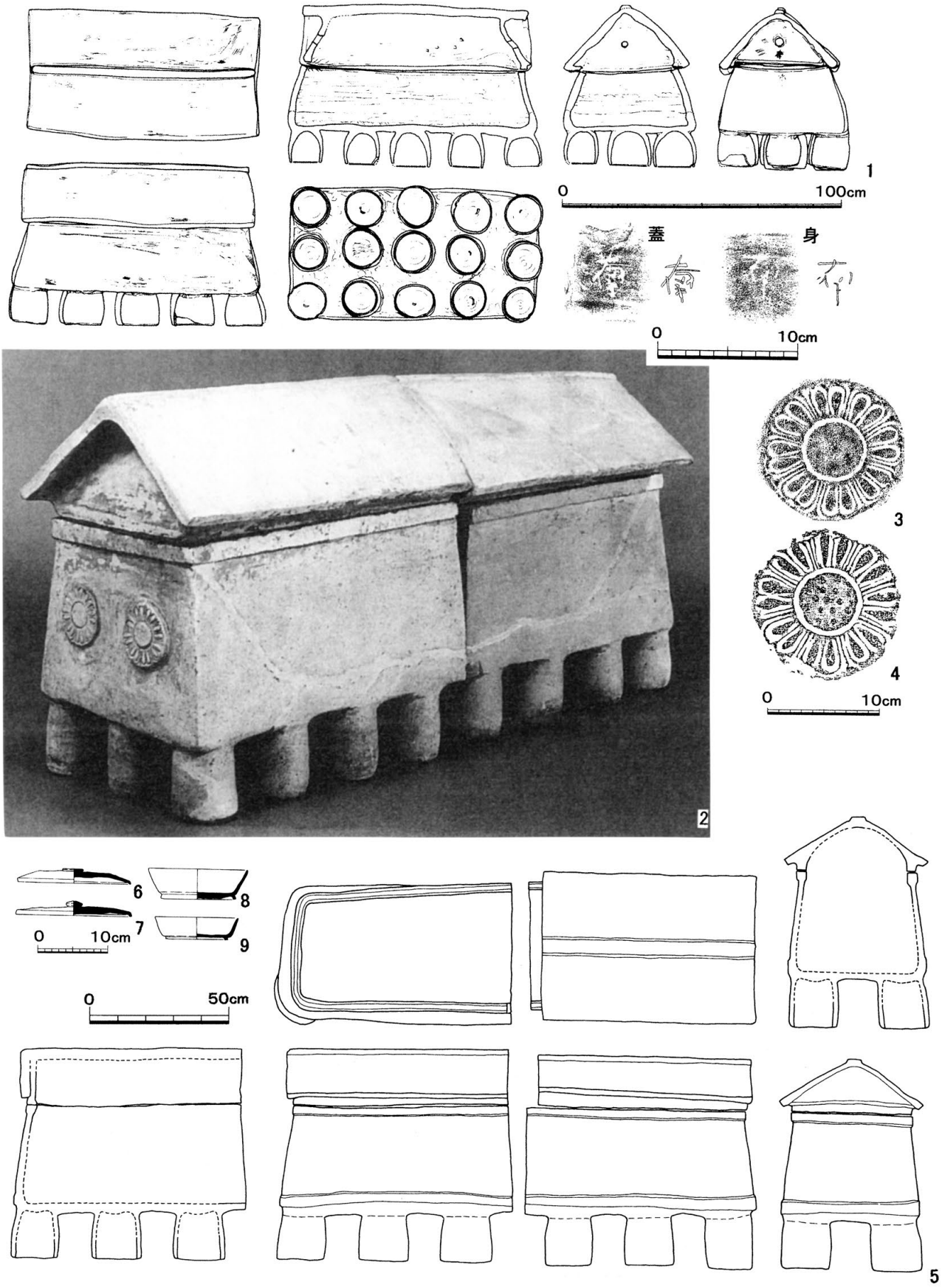

図４　瀬戸内市内古墳出土陶棺と関連資料（１，５：1/20，１の文字資料：1/4，２：約1/20，３，４：1/5，６～９：1/8）

１．水落古墳　２・３．本坊山古墳　４．備前市福田　５～９．桂山十二ヶ畝５号墳

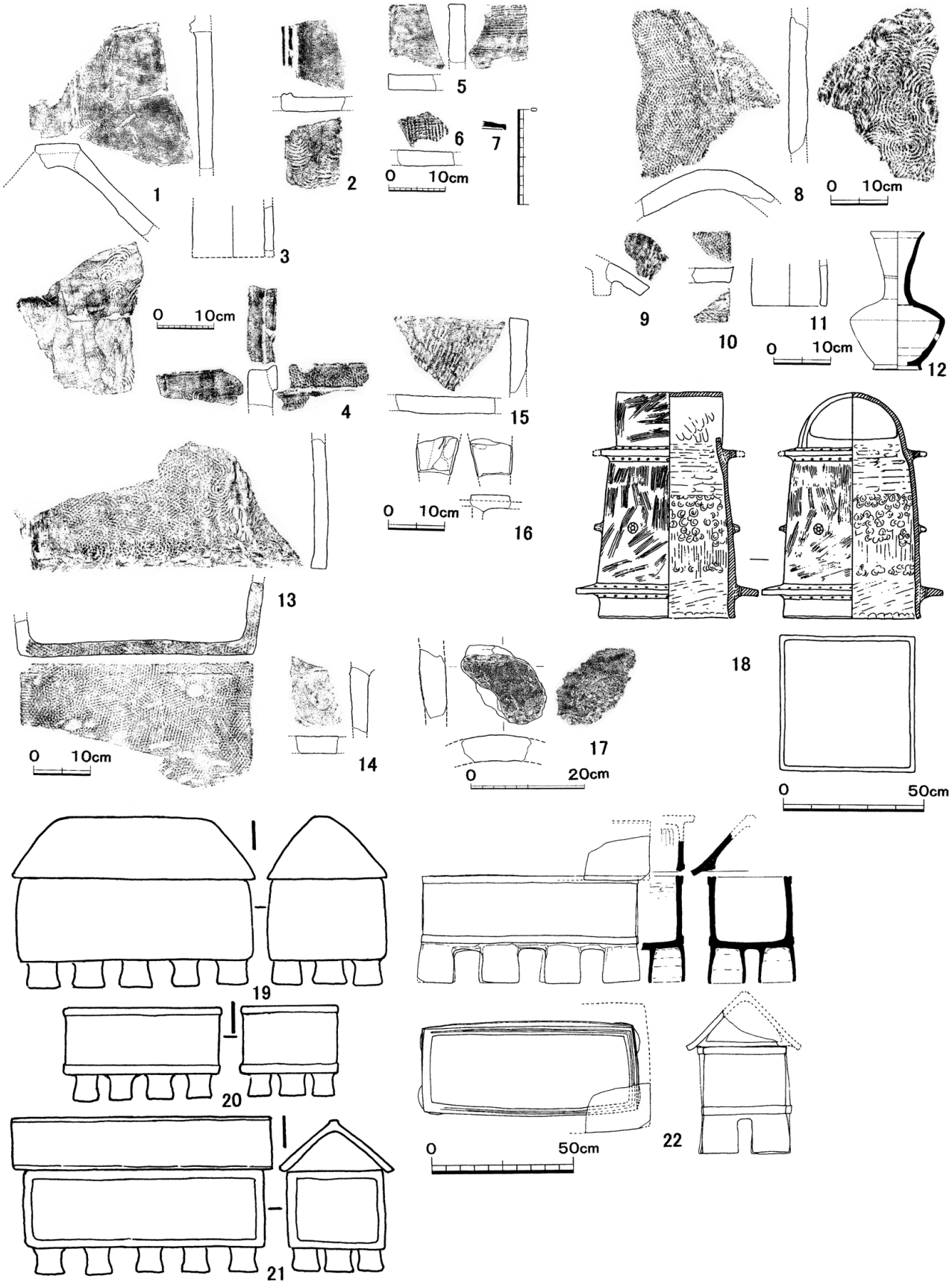

図５　備前邑久窯跡群周辺の古墳出土陶棺と関連資料（１～17：1/10，18・22：1/20，19～21：約1/20）

１～16．亀ヶ原古墳群（１～４：７号墳　５～７：10号墳　８：21号墳　９～12：22号墳　13・14：23号墳　15・16：24号墳）
17．蟋４号墳　18．西須恵宮ノ尻　19．磯上　20．ヤマンドウＡ　21．ヤマンドウＢ　22．惣田奥４号墳

凸帯をもち，表面に斜格子タタキを残し，その内面に同心円文当て具痕跡を残すが，ヘラケズリされている。身の上面は基本的に平らであるが，外面に貼り付けた凸帯部分が少し上に突出している。脚（図５－３）はロクロ成形で直径約15cmの円筒形である。いずれの破片も暗灰色を呈し，硬く焼きしまっている。

亀ヶ原10号墳　不確実ではあるが，一辺約10mの方墳の可能性がある。長さ約８m，幅約1.0～1.2mの無袖横穴式石室を内部主体としている。

陶棺は屋根か身か区別できない板状破片が２点出土している（図５－５・６）。５は外面に粗いカキ目状の痕跡がみられ，内面はナデ，６は外面に木目に直交する平行タタキの痕跡がみられる。厚さは2.5～2.8cmで，焼成はどちらも堅緻である。ともに採集された須恵器の杯蓋（図５－７）は８世紀前半頃のものと推測される。

亀ヶ原21号墳　直径約10mの円墳で，長さ約2.8m，幅約0.5～0.6mの無袖横穴式石室かと推測される石室を内部主体としている。

陶棺は，須恵質陶棺の身のコーナー部分ではないかと推測される破片が１点出土している（図５－８）。外面は斜格子タタキ，内面は同心円文が密に施されている。厚さは約3.6cmである。

亀ヶ原22号墳　直径約16.5mの円墳で，長さ約5.3m，幅約１mの無袖横穴式石室を内部主体としている。直径10m前後の本古墳群の中ではやや大きな古墳である。

陶棺は須恵質家形陶棺で，外面平行タタキ・内面ヘラケズリの屋根の一部（図５－９），外面斜格子タタキ・内面同心円文当て具痕跡を残す身の一部（図５－10），ロクロ成形で，直径約14cmの脚の一部（図５－11）が出土している。屋根と身の厚さは約2.4cmである。いずれも明灰色で，硬く焼成されている。

亀ヶ原23号墳　直径約9.3mの円墳で，内部主体は無袖横穴式石室である。

陶棺は，２分割された身の底部破片（図５－13）と別の底部破片と推測されるもの（図５－14）が出土している。13の身の外面は細かな格子タタキ，内面は同心円文が密に施され，２分割の切断面は格子タタキ痕跡が残っている。身の幅は43cm，厚さは2.4cmである。身の幅が50cmの桂山十二ヶ畝５号墳のものより少し狭く，一回り小さいようであるが，遺体を伸展葬で納めることができる「大」の可能性がある。14は直径約11cmの円形の剥がれた痕跡が見られる。

亀ヶ原24号墳　直径約9.5mの円墳で，内部主体は長さ約3.7m，幅約0.9mの無袖横穴式石室である。

採集された陶棺の身の上部の破片（図５－15）は，外面は平行タタキの痕跡を残し，明灰色，内面は赤橙色でやや軟質である。厚さは約３cmである。

亀ヶ原25号墳　詳細は不明であるが，小型の円墳で，内部主体は長さ約３m，幅約0.6mの無袖横穴式石室である。身の底部幅46cmで，脚が２本見える状況で須恵質陶棺が現在も埋もれたままである。脚はもともと３本のようである。この身の幅から「大」のグループに属する可能性がある。

その他　この亀ヶ原古墳群の周辺では，ほかに釜ヶ原（亀ヶ原），亀ヶ原，尻無，亥子田などで陶棺が出土していることが村上1980や間壁1982aなどに記されている。陶棺出土古墳とされている「釜ヶ原（亀ヶ原），亀ヶ原」はこの亀ヶ原古墳群内のどれかである可能性があり，「尻無」は亀ヶ原古墳群の南に位置し，「亥子田」は亀ヶ原古墳群の東に位置する亥子田古墳群であろう。前述の西山・札崎古墳群や水落古墳もこの亀ヶ原古墳群に近接し，この地域の古墳群で多くの陶棺が埋葬用の棺として使用されたことがわかる。1985年の分布調査では約30基の亀ヶ原古墳群のうち７基で陶棺を確認している。この亀ヶ原古墳群を含めた周辺の古墳群における陶棺の使用率はかなり高いことが特徴としてあげられそうである。

この地域は古代邑久郡の須恵郷の中枢部近くにあり，須恵郷の７世紀から８世紀前半の主要な墓域であったものと推測される。また，広い意味でのこの古墳群の中にも須恵器窯跡がある。

⑨西須恵宮ノ尻（図５－18）（間壁1981，亀田1998d）

瀬戸内市長船町西須恵，広高山西側中腹の美和神社への参道付近で，1941年，松の根を採集中に発見されたと伝えられる資料である。その特異な形から注目されていたが，用途についてははっきりしていなかった。1981年，間壁忠彦によって再検討され，骨蔵器と推測されている。

下端で一辺約48cmの正方形を呈し，上部に向かって徐々に小さくなる方柱状で，上部にアーチ形の屋根が着く。総高は約80cmである。屋根の妻部はふさがれておらず，そこから中をのぞくことができる。底は抜けている。外面の下端から約10cmと屋根のすぐ下の部分に廂状の凸帯がつけられている。この上下の廂状凸帯には約45cm間隔に直径約５mmの小孔が開けられている。上下２つの廂状凸帯の間には各面に２個ずつの突起がつけられている。厚さは約1.5～2.5cmである。外面はハケ目が粗くつけられており，内面は同心円文の当て具痕跡とナデの痕跡が残っている。焼成はやや軟らかいようであり，色調は白灰色を呈し，一部灰色を呈している。時期はわからないが，８世紀前半頃と推測されている。

なお，この特異な資料の類例が遠く埼玉県東松山市立野遺跡で出土していることを酒井清治が報告・検討している。共伴する須恵器は７世紀末～８世紀初めのもので，時期的にも近い。この資料以外にも埼玉県熊野遺跡で類例が出土しているようであるが，極めて珍しい形態の，そして陶棺（火葬容器）と推測されるものが吉備と

武蔵の地で出土していることの意味は重要である。酒井はこの時期の火葬の問題も含めて朝鮮半島との関わりを述べている（酒井2002）。

⑩蟋４号墳（図５－17）（亀田1998b）

瀬戸内市長船町土師に位置する蟋古墳群のうちの１基である。直径約12mの円墳で，玄室長約４m，玄室幅約1.7m，羨道長約1.6m，羨道幅約1.35m，石室全長約5.6mの奥壁からみて右片袖横穴式石室を内部主体とする。そしてこの石室には両側壁にのみ石をかませた石棚があり，この石棚の上で18×９cm，厚さ4.6cmの土師質陶棺片を採集した。外面はタガなどの痕跡はなく，ナデで調整されている。備前邑久窯跡群およびその周辺の古墳での土師質陶棺は珍しい。

古墳の時期は，須恵器などがなくわからないが，石室構造からは６世紀後半～７世紀代のものと推測される。

⑪磯上（図５－19）（若林1892，京都大学1968，間壁夫妻1981）

瀬戸内市長船町磯上で出土したようである。須恵質寄棟家形陶棺である。屋根は寄棟形で，両方の妻側上部に直径約２cmの小円孔がある。長さは82.5cm，幅約36cm，棟の平坦部幅６cmである。身は長さ84cm，幅42cm，深さ約26～28.5cm，脚は３列５本で15本である。色調は全体に灰色である。寄棟家形陶棺は備前邑久窯跡群およびその周辺出土のものとして，新林（宮嶋）窯跡資料くらいしかなく，重要な陶棺である。

磯上の山裾部には16基確認されている大塚古墳群などがあり，この中に直径20mの円墳である大塚11号墳がある（亀田1998a）。また，詳細は不明であるが，この地域出土とされる装飾須恵器も３点ほどあり，注目される地域である。この陶棺も８世紀代のこの地域を検討する上で重要な意味を持つものと考えている。

⑫ヤマンドウ（図５－20・21）（時實1934，間壁夫妻1981）

瀬戸内市長船町飯井山ノ堂かと推測されている。古く美和村字ヤマンドーで発見されたとある。

20が小さいほうで，仮にヤマンドウＡ，21が大きいほうで仮にヤマンドウＢとしておく。20は須恵質家形陶棺の身である。長さ53cmで，小口部に「×」がヘラ書きされているようである。身の外面の上端部・下端部に凸帯を持つようである。脚は３列４本で12本である。

21は須恵質切妻家形陶棺で，身の長さが84cm，脚は３列５本で15本のようである。図によれば身の外面の側面・小口面の端部縦横に凸帯を持つようである。土師質に見えるようである。

⑬惣田奥古墳群（図５－22）（間壁夫妻1982，間壁1982a）

備前市佐山に位置する。備前市南部の佐山地区の西端に12基の惣田奥古墳群があり，そこに隣接して惣田奥古墓群もある（岡山県2003b）。

惣田奥４号墳　４号墳は古墳群のなかのやや南寄りにあり，現状ではわからないが，直径約６mの円墳で，長さ3.6m，幅0.95～１mの無袖横穴式石室を内部主体としている。1981年に倉敷考古館が発掘調査を行い，石室の奥側で陶棺，その他８世紀前半から中頃の須恵器片と窯壁（間壁夫妻1982，p.8，下から５行目）が出土している。

陶棺は，須恵質切妻家形陶棺で，身は長さ76cm，幅29～31.8cm，厚さ1.5～２cm，脚は２列４本で８本である。脚はロクロ作りの直径13～14cm，厚さ約１cmの円筒形である。屋根は妻側の一部破片が出土している。屋根・身ともに外面は丁寧にナデられており，タタキの痕跡は確認できない。身の上端側に幅約2.5cm，下端側に約３cmの凸帯を巡らせている。凸帯の厚さは５mm弱である。身の上面（上縁端部）は外面の凸帯も含めて厚さ約３cmあり，そこにV字形の溝がヘラで切るように刻まれている。色調は白色の強い青灰色で，多少軟質であるが，須恵質である。大きさは「中」グループである。

この陶棺に関して，重要なことはその大きさが長さ76cmしかなく，遺体をそのまま伸展葬で納めることができないことは明らかであるが，陶棺の中で発見された人骨が「炭化して変色したり，火によるひずみもみられ，火葬された骨であることには間違いない」と確認されたことである。

そしてこの古墳ですでに出土していた薬壺形短頸壺と石室内から出土した皿が胎土・高台の特徴などで類似していることから，８世紀初めに無袖横穴式石室を内部主体とする横穴式石室が築造され，火葬骨を納めた須恵質切妻家形陶棺が納められ，その後８世紀中頃に皿を蓋とした火葬骨を納めた薬壺形短頸壺が追葬されたと考えられている。

備前南東部地域における７世紀末～８世紀前半の横穴式石室墳，陶棺のあり方，火葬のあり方などを教えてくれる貴重な調査成果である。

その他の惣田奥古墳群　そのほかの惣田奥古墳群においても５号墳（長さ約3.5m，幅0.8mの片袖横穴式石室）で大き目の須恵質切妻家形陶棺，８号墳（直径８mの円墳，長さ４m，幅１mの無袖横穴式石室）で須恵質陶棺，10号墳（直径12mの円墳，長さ5.2m，幅１mの無袖横穴式石室）で２分割の大きめの須恵質切妻家形陶棺片と骨蔵器に使用されたと推測される小さめの切妻家形陶棺（「大」と「中」か「小」），11号墳（直径10mの円墳，長さ4.1m，幅0.9～１mの無袖横穴式石室）で須恵質切妻家形陶棺と推測されるものが出土している。

このように惣田奥古墳群は陶棺を比較的多く使用した古墳群ということができ，近くの火葬墓群を含め，７世紀末頃から継続して平安時代まで造墓され続けた地域ということができそうである。

⑭背戸の山古墳（守時1936，間壁1982a）

備前市福田（和気郡鶴山村大字福田字背戸の山［一

名坪ノ山]）にあったとされるものである。守時桂太が明治２（1869）年に出土したと蓮華文を飾った陶棺に，「萬年通寶」（760年鋳造）と「神功開寶」（765年鋳造）が入っていたと報告している。そこにつけられた図には屋根の妻部に蓮華文が描かれている。身の大きさは長さ75cm，幅33cmである。「中」グループに属する。

詳細は不明であるが，蓮華文を飾った陶棺は前述のように長船町本坊山古墳のものがあり，この本坊山古墳の蓮華文が福田地区で出土した蓮華文軒丸瓦と類似することがわかっており，この背戸の山古墳の場所が備前市福田であることも偶然のことなのか，この福田という場所に何か意味があるのか，今後の課題としたい。

３．鴟尾

（１）窯跡出土資料

①寒風窯跡群（図６，図７－１～７）（瀬戸内市2009）

瀬戸内市牛窓町長浜に位置する。１－Ⅱ号窯跡焼成部上層出土の鴟尾は，本来この窯跡に伴うものではなく，１－Ⅰ号窯跡の製品が紛れ込んだ可能性がある。また，古く寒風１号窯跡群灰原で出土したものについても2005～2008年度の調査での確実な資料は１－Ⅰ号窯跡のみであり，本来１－Ⅰ号窯跡の製品と推測されている。そうすると，陶棺も同様であり，寒風窯跡群で陶棺と鴟尾を生産した窯跡は１－Ⅰ号窯跡だけかもしれない。ということで，寒風窯跡群出土鴟尾は一緒に説明することにする。

なお，鴟尾の分類は基本的に奈良国立文化財研究所1980の分類に従うが，今回，筆者が細かな分類ができないこともあり，仮にＡ類は縦帯に円文，鰭部に段型を飾るもの，Ｂ類は鰭部に蕨手文を飾るもの，Ｃ類は鰭部に木葉文を飾るもの，Ｄ類は無文のものとしておく。

寒風窯跡群出土例の一部を図６と図７－１～７に図示している。基本的に格子タタキ板と同心円文当て具を使用して成形し，ヘラケズリや板ナデ，一般的な指などによるナデで仕上げている。そしてヘラ状工具による鰭部の段加工や蕨手文・木葉文（いずれも羽根を表現）の施文，凸帯・円文などの貼りつけを行い，全体を仕上げているようである。色調は灰白色，黄灰色，褐灰色など幅があるが，焼成は基本的に良好で，焼け歪んだものも多くみられる。

図６－５～７はこれまでの出土例と多少異なるようにみえるが，基本的に蕨手文が重なって表現されたものと推測される。また，Ｃ類の木葉文（図７－５）は，寒風窯跡群出土例は文様の縦軸は稜線で表現されているが，後述する新林（宮嵶）窯跡例は中央稜線の上にヘラで軸線が描かれている。摂津細工谷遺跡のものもヘラで軸線が描かれている。

②切明窯跡（図７－８・９）（亀田1997b・2006g）

瀬戸内市牛窓町長浜と邑久町尻海にまたがる場所に位置する。寒風窯跡群の東約250mの場所，寒風窯跡群から邑久町大土井正八幡宮に抜ける細い道沿いにある。広義の寒風窯跡群の一部とみてもおかしくはない。

鴟尾の破片は２点採集されており，８は頭部の破片で外面は格子タタキのあと，ヘラで表面をケズったりナデたりし，そのあと上部には細い凸帯を貼り付けて格子状の文様を作っている。内面には同心円文当て具痕跡が残る。この文様と類似した鴟尾頭部が寒風窯跡群でも出土しており，大脇潔は木葉文のＣ類鴟尾と接合するように並べている（大脇1999，p.61，第138図右下）。

９は，外面は格子タタキ・ナデ，内面は同心円文当て具痕の上をナデ，一部同心円文当て具痕跡が残る。

共伴する須恵器は７世紀末から８世紀前半であり，この鴟尾もその頃のものと推測される。

③新林（宮嵶）窯跡（図７－10・11）（伊藤1974，亀田2006f）

瀬戸内市邑久町尻海に位置する。陶棺が出土しており，窯跡の概要に関しては，ここでは省略する。

７世紀前半～中葉と７世紀末～８世紀前半の２グループの須恵器とともに須恵質寄棟家形陶棺（図３－４）と木葉文（鳥の羽根）を表現した鴟尾片（図７－10）が出土している。

10は鰭部分の15cmほどの破片で，木葉文が２枚削りだされている。この木葉文の中央には細い線が刻まれている。反対側の面には小さな格子タタキの痕跡が一部残っている。11はどの部分になるのかよくわからないが，外面に斜格子タタキ痕跡が残り，側面にヘラによる刳り込み（？）がある。

時期は摂津細工谷遺跡出土鴟尾との関係，共伴する須恵器から７世紀末～８世紀前半と推測される。

この木葉文中央に線を持つ鴟尾が摂津細工谷遺跡で出土しており，寒風窯跡群では出土していないことから，この新林（宮嵶）窯跡の製品が摂津まで運ばれた可能性が推測されている。

④大城谷南窯跡（伊藤1987）

備前市佐山のやや西寄りに位置する。伊藤1987のp.550に鴟尾が焼成されている，と記されているのみで，詳細は不明である。陶棺が採集されている大城谷北窯跡のすぐ南側である。備前邑久窯跡群で鴟尾を生産している窯は，ここ以外は寒風窯跡群周辺のみで少し離れた場所である。

時期はよくわからないが，７世紀末～８世紀前半のようである。

（２）古墳・寺院出土資料

①寒風古墳（図８－１・２）（瀬戸内市2009）

陶棺の項でも述べたように瀬戸内市牛窓町長浜，寒風

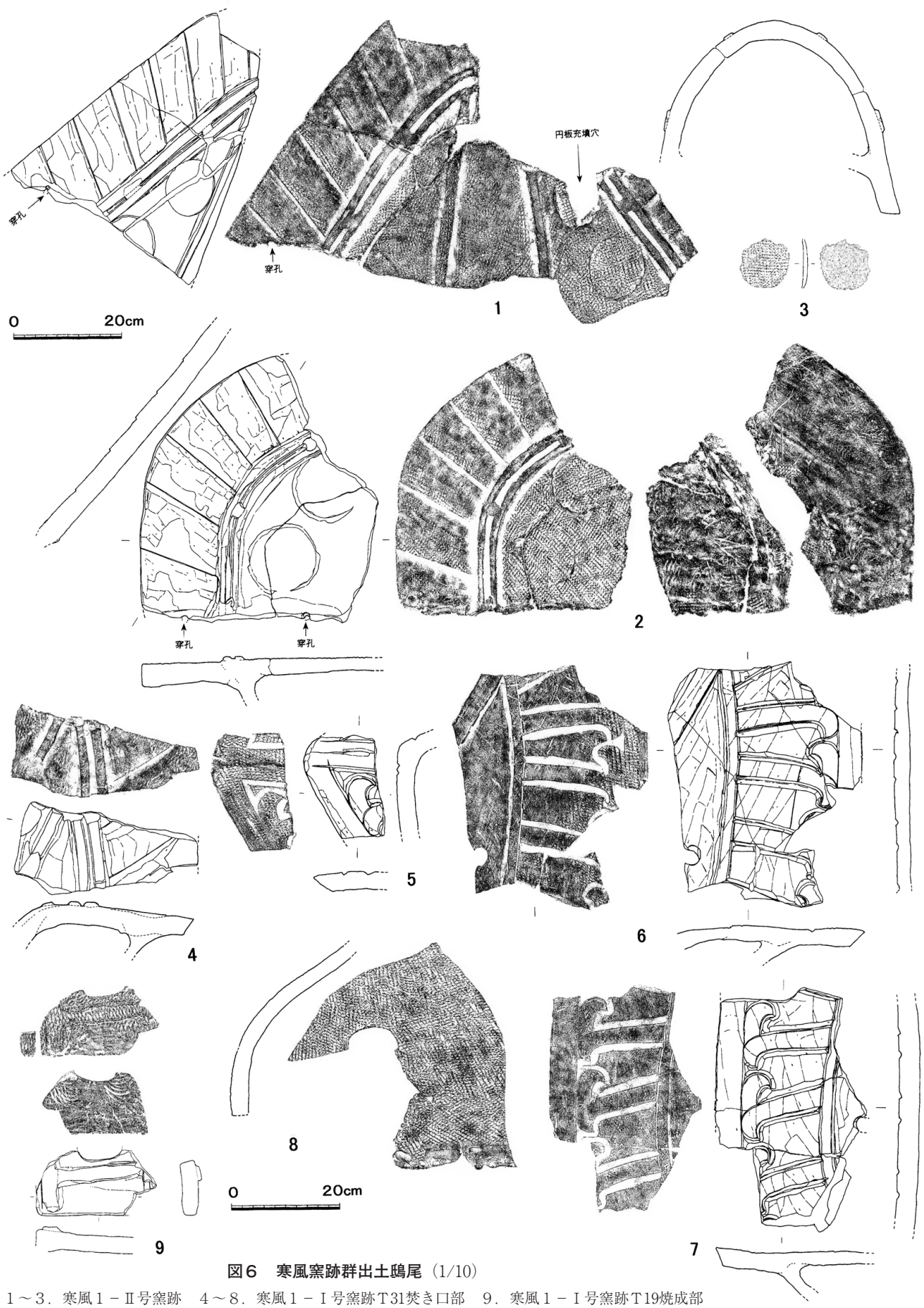

図６　寒風窯跡群出土鴟尾（1/10）

１～３．寒風１－Ⅱ号窯跡　４～８．寒風１－Ⅰ号窯跡Ｔ31焚き口部　９．寒風１－Ⅰ号窯跡Ｔ19焼成部

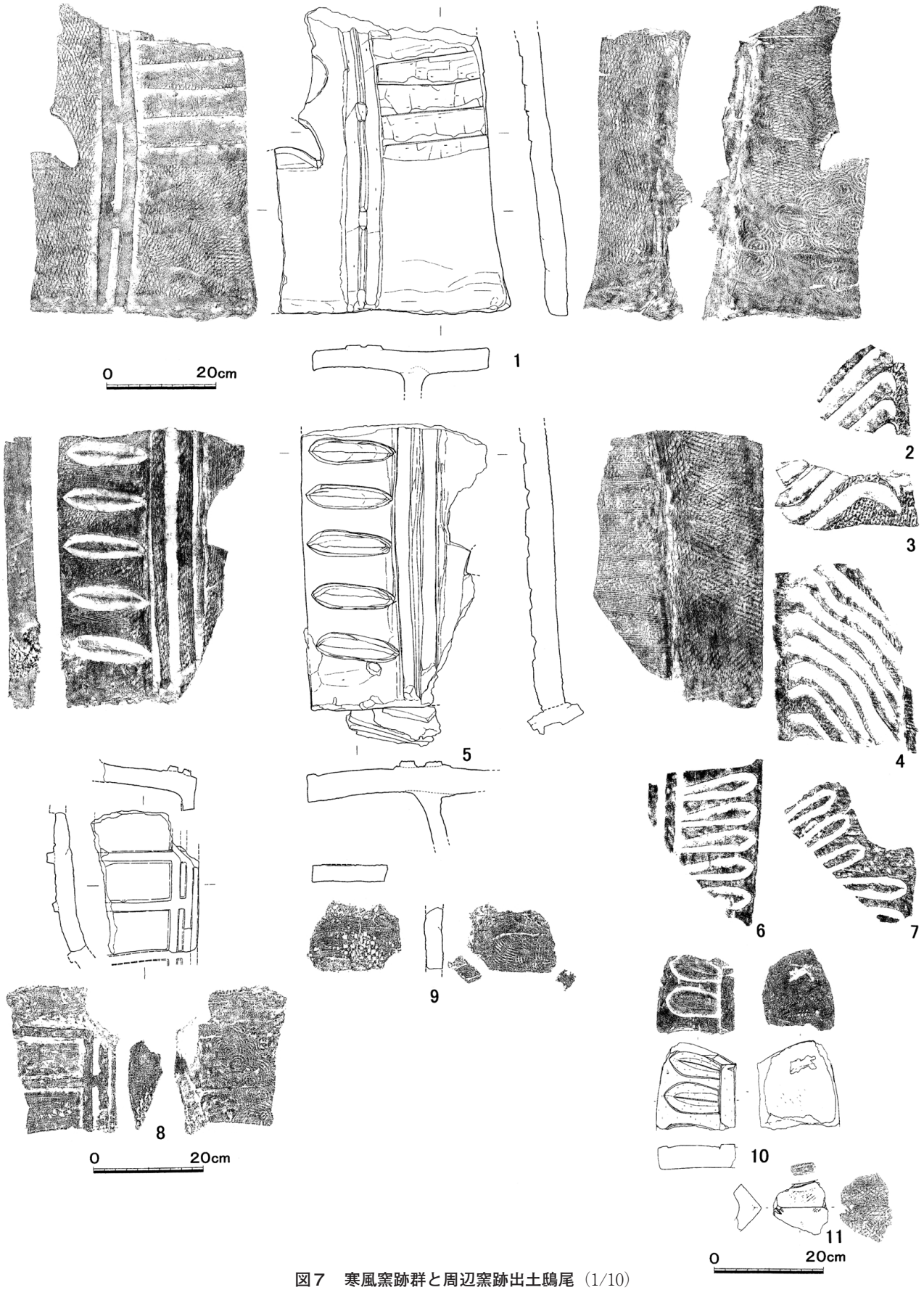

図７　寒風窯跡群と周辺窯跡出土鴟尾（1/10）

１～７．寒風１号窯跡群　８・９．切明窯跡　10・11．新林（宮嶋）窯跡（Ａ類：１，Ｂ類：２～４，Ｃ類：５～７，10）

窯跡群内に位置する。直径７m弱の円墳で，残存長3.3m，奥壁幅0.93m，入り口幅1.10mの無袖横穴式石室の閉塞部で閉塞石とともに寒風窯跡群で焼成されたと推測される鴟尾片が２点出土している。

１は鰭部に蕨手文をヘラでケズリ出したＢ類である。削り残した部分に斜格子タタキが残る。内面は斜格子タタキと同心円文当て具痕跡がかすかに残る。２は鴟尾の下端部で，外面全体に斜格子タタキが残り，下端から12.7cmのところに直径9.1cmの円孔があけられている。その付近はナデられ，タタキが一部見えない。内面は横方向の粗いナデがみられる。

②服部廃寺（図８－３）（長船町1997，池田1998f）

瀬戸内市長船町服部に位置する。４世紀の前方後円墳である花光寺山古墳が東の丘陵上に位置する。

発掘調査によって金堂跡，講堂跡，回廊跡などが検出され，鴟尾は講堂跡周辺から７点，西側建物跡から１点出土しており，本来講堂で使用されたものと推測される。

図８－３は鰭部・縦帯・胴部・腹部の破片で，鰭は正段型である。縦帯は中央が窪んだ断面台形状の凸帯を２条貼り付け，その間に直径約４cmの珠文を貼り付けた痕跡が残っている。外面は鰭部のヘラケズリされた部分以外に斜格子タタキが全面に残り，内面は胴部に斜格子タタキ，それ以外に同心円文当て具痕跡が残っている。厚さは３～3.5cmである。寒風Ａ類の鴟尾である。

服部廃寺は川原寺式複弁八葉蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦で７世紀末頃に創建され，14世紀初め頃に廃絶したと考えられている。この鴟尾に関しては，その特徴から寒風窯跡群関連の窯で生産され，７世紀末～８世紀初め頃の講堂の創建時に使用されたものと推測される。

４．若干の検討

（１）陶棺

陶棺は，岡山県と近畿地方を中心にみることができるやきものの棺である。古くから注目され，研究がすすめられてきたが，吉備の陶棺研究が本格化するのは1980年代以降である。以下，小稿に関わるものを少しあげておく。

まず，村上幸雄が稼山遺跡群の報告書で全国的な集成を行い（村上1980），これを踏まえた研究が進むことになる。1980年代には，間壁葭子（1982a，b・1983），村上幸雄（1987a，b），杉山尚人（1987）などが分類・編年・分布などを整理し，1990年代以降に研究が展開していく（杉山1992，横田美香1996・2003，光本順2001，中村展子2004，倉林眞砂斗2005，宮岡昌宣2010・2012，絹畠歩2013・2016など）。

このなかで小稿が対象とした備前邑久窯跡群を中心とした地域の陶棺研究は，各研究者ともに寒風窯跡群との関わりで述べられているが，その代表的なものが間壁葭子1982a「切妻家形陶棺」であり，小稿は基本的にこの間壁の研究をベースに新しい資料を付け加え，多少の検討を行うものである。また，窯跡資料を意識したものが中村展子2004「生産からみた陶棺の変容とその背景」であり，これも重要な視点である。

窯跡出土資料　備前邑久窯跡群で陶棺を生産したことが推測できる窯跡はやや不十分なものも含めて12ヵ所である。そのうち発掘調査で陶棺が出土した窯跡は，寒風１－Ⅰ号窯跡（図２－１～４），新林（宮畷）窯跡例（図３－４）のみで，そのほかは採集資料であり，現在その所在がわからないものもある。

まずこの確実な２ヵ所の窯跡資料を整理する。

寒風窯跡群の資料は前述のように１－Ⅲ号窯跡資料，１－Ⅱ号窯跡ともに確実にその窯跡で生産されたということができるものではなく，１－Ⅰ号窯跡で作られた可能性が推測されている。１－Ⅰ号窯跡は７世紀末から８世紀前半の須恵器が共伴しており，この陶棺もこの時期のものと考えられる。

図２－１は２分割のもので，身の長さを復元すると172.8cmになる。間壁葭子（1982a）が陶棺を大・中・小と分類して検討しているが，小稿では註３のように仮に大まかに分類した。遺体を伸展葬で納めることができ，長さがおおよそ130cm以上のものを「大」グループ，それより小さく，伸展葬で遺体を納めることが難しい，おおよそ130～50cmのものを「中」グループ，さらに小さい，長さ50cm以下のものを「小」グループとした。「大」グループは成人を伸展葬で納めることができるもの，「小」グループはその大きさから基本的に火葬骨を納めるものと考えている。「中」グループについては，備前市惣田奥４号墳例のように長さ76cmで火葬骨が見つかっているものがある。「中」グループのなかには身長の低い人物や小児を伸展葬で納めたものが存在する可能性もあり，個々の埋葬のあり方については当然検討しなければならないが，現時点では上記のように大まかに分類した。そして，「大」グループのものは焼成の観点からも２分割されたものが多いようであり，「２分割」も一つの目安になると思っている。

陶棺の幅に関しては，上記の長さの基準と同じように遺体を伸展葬で納めるときの肩幅が目安になり，30cm以上を「大」グループと考えるが，「中」グループでも40cm前後のものがあり，明確な区別は難しそうである。

寒風１－Ⅰ号窯跡の資料は，遺体をそのまま，伸展葬で納めることができる「大」グループのもので，この大きさのものが７世紀末～８世紀前半に生産されていたことがわかる。

また，この寒風窯跡群の資料は基本的にタタキで成形

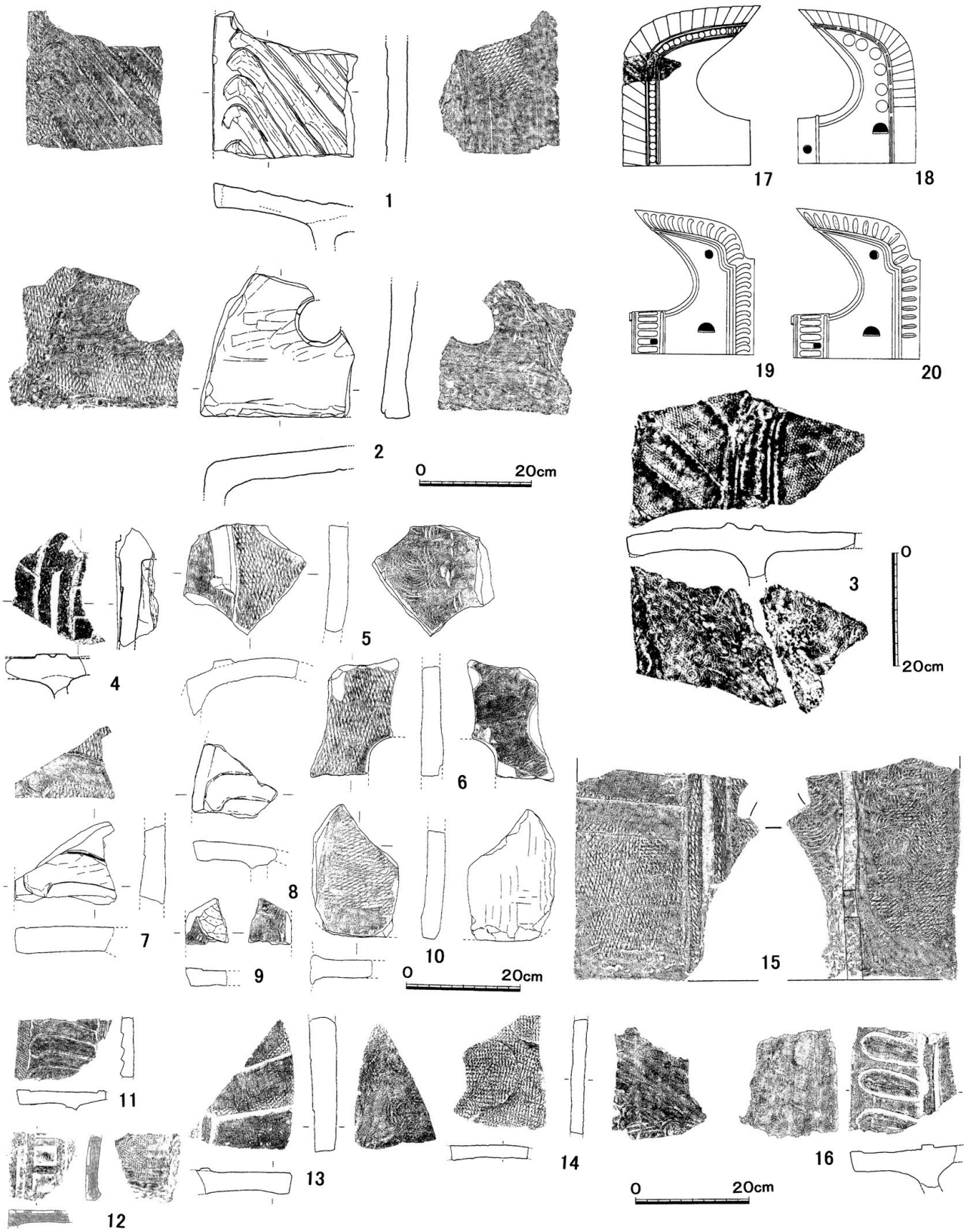

図８　各地域出土寒風系鴟尾（1～16：1/10，17～20：スケールアウト）

１・２．備前寒風古墳　３．備前服部廃寺　４．備前幡多廃寺　５～10．備前賞田廃寺　11．讃岐片山池１号窯跡　12．讃岐鴨廃寺　13・14．讃岐田村廃寺　15．大和奥山廃寺　16．摂津細工谷遺跡　17．備前服部廃寺復元図　18～20．寒風窯跡出土鴟尾模式図（Ａ類：17・18，Ｂ類：19，Ｃ類：20）

し，その痕跡をそのまま残すものと図２－４のようにハケで仕上げたものがある。後者はあまり見かけないが，この資料によって，寒風１－Ⅰ号窯跡でこのようなハケで仕上げた陶棺があることがわかる。屋根の幅が復元で約60cmあり，図２－１などの身と組み合う大きさで，これも「大」グループとして問題ない。

なお，間壁が時實資料を略測し提示した資料（図２－５～10）の中に屋根の幅が約63cm，身の幅が約50cmのものがある（５）。これらも図２－１～４と同じ「大」のグループに入り，これら「大」グループが７世紀末～８世紀前半に生産されていたことがわかる。

一方，図２－８は屋根の幅が39cmで，身の幅は約30cmである。幅30cmでは遺体をそのまま納めることは難しく，火葬骨が納められていた惣田奥４号墳の陶棺の幅が約30cmであり，８は火葬骨用，または小児など身体がやや小さめの人物用の「中」グループといえそうである。

つまり，７世紀末～８世紀前半に操業した寒風１－Ⅰ号窯跡では遺体をそのまま伸展葬する「大」グループと火葬骨や身体の小さな人物を納めた可能性がある「中」グループの陶棺両方を生産したものと推測される。これが時間差なのか，それとも同時期に「大」「中」両者を生産していたのか，これは今後の検討課題である。

新林（宮嵶）窯跡資料（図３－４）は屋根の推定幅が約70cmの須恵質寄棟家形陶棺である。これから推測できる身の幅は約55cmで，前述の寒風窯跡群「大」グループ資料の幅に近い。この窯跡では７世紀前半～中葉と７世紀末～８世紀前半の２時期の須恵器が出土しており，寒風窯跡群の資料からは新しい段階のものと推測しやすいが，古い段階のものである可能性も無視できない。

また，この資料は寄棟家形陶棺であり，備前邑久窯跡群周辺では長船町磯上例があるだけで，極めて珍しい資料である。磯上資料は身の大きさが長さ84cm，幅42cmで，新林（宮嵶）窯跡資料より一回り小さい火葬骨用のものと推測されるが，新林（宮嵶）窯跡資料は伸展葬用のものであり，少なくとも，この備前邑久窯跡群周辺に「大・中」の寄棟家形陶棺が存在したことがわかる。

このほか，やや不確実なものも含め，天堤窯跡，新山２号窯跡，庄田工田窯跡，本庄佐井田口遺跡，亀ヶ原１号窯跡，花尻南窯跡群，佐山新池１号窯跡，大城池窯跡，大城谷北窯跡で陶棺片が採集されており，新山２号窯跡例と花尻南窯跡群例は明らかに他のタタキ作りで，口縁部が平らになる寒風窯跡群資料のようなものとは様相が異なる。

また，年代に関して，前述のように確実な寒風１－Ⅰ号窯跡は７世紀末から８世紀前半であるが，新林（宮嵶）窯跡資料は７世紀前半まで遡る可能性は無視できない。そして新山２号窯跡の陶棺は共伴資料が７世紀前半であり，これが正しければ，備前邑久窯跡群の陶棺資料としては，最古のものになりそうである。ただ，形態の違いは意識しておく必要がある。

それから，佐山新池１号窯跡資料は８世紀後半を中心とする時期のもので，器壁が薄く，一般的な陶棺ではなく，骨蔵器か，瓦塔（瓦堂）などである可能性もある。

佐山新池１号窯跡例を外すと，陶棺の下限は８世紀前半とひとまずなりそうである。ただ，「萬年通寶」（760年）や「神功開寶」（765年）が出土したとされる背戸の山古墳の「中」グループ陶棺は問題がなければ，８世紀中頃まで使用されたことになる。

古墳出土資料　備前邑久窯跡群周辺の７～８世紀前半の古墳では，陶棺が約50ヵ所確認されている。おもに須恵質家形陶棺が多く，土師質のものも一部あるようである[5]。

陶棺が出土した古墳で，陶棺の形や大きさがわかり，共伴する須恵器などが確認できるものは極めて少ない。

邑久町水落古墳は内部主体や共伴資料は分からないが，全体がわかる陶棺が出土している。須恵質切妻家形陶棺で，屋根の両方の妻に直径３cmほどの円孔があけられており，一方の妻の円孔の下にヘラで「南」という文字が書かれている。また，その位置の真下にあたる身の小口部上部にも「南」がヘラ書きされている。陶棺は，「南」の文字が南側になるように置かれていたとのことである。まず文字が書かれたとても貴重な陶棺資料である。

調整は，全体に板状工具でナデられており，タタキ作りで作られたのかはわからない。ただ，脚はロクロ使用で作られている。

身の上部長80cm，幅35cm，屋根の長さ84cm，幅46cmで，寒風窯跡群の「中」グループのものに近いようである。当然，遺体を伸展葬で納めることはできず，火葬骨用であると推測される。

長船町本坊山古墳も陶棺の全体像はわかるが，出土古墳に関する情報がほとんどない。ただ，地元の方の情報から東須恵の山崎７号墳がその出土古墳ではないかと推測されるようになった。約13×11mの方墳で，長さ４m以上，幅約１mの無袖横穴式石室が内部主体である。

陶棺は身の一方の小口に蓮華文を２個飾った須恵質切妻家形陶棺である。２分割で，２つ合わせた屋根の全長が176cm，幅54.6～56.4cmで，伸展葬で遺体をそのまま納めることができる「大」グループのものである。

基本的に屋根・身ともにナデ仕上げであるが，内面に格子タタキの痕跡が一部見られる。

共伴資料は分からないが，陶棺に飾られた蓮華文によって７世紀末～８世紀前半のものと推測される。この蓮華文に関しては古く梅原末治が述べているように備前市福田出土の軒丸瓦とよく似ている。その福田に関する

遺構などはよくわからないが，寺奥廃寺と呼ばれる場所があり，そこで類似の軒丸瓦の小片が出土している。そしてこの小片と類似した外区文様を持つものが岡山市の備前国府関連遺跡であるハガ遺跡で出土している。内区の複弁八葉蓮華文，中房内の１＋６＋８の蓮子の数，中房のまわりに溝をめぐらすことなど，類似している。長船町本坊山古墳（山崎７号墳）－備前市福田・寺奥廃寺－岡山市ハガ遺跡とつながることがわかる。山崎７号墳は約13×11mの方墳で，当時の邑久郡の郡司クラスの人物が被葬者で問題なく，蓮華文を飾った須恵質切妻家形陶棺も郡司クラスの人物の棺として問題ない。そしてこれが備前国府関連遺跡であるハガ遺跡とつながることは，７世紀後半以降の備前邑久窯跡群の窯が備前国府や邑久郡と関わっている可能性をより高めるのである。

また，詳細は分からないが，上述の備前市福田の背戸の山古墳で屋根の妻部に蓮華文を飾った陶棺が出ているとの報告がある。身の大きさは長さ75cm，幅33cmで，火葬骨用と推測されるが，ここには「萬年通寶」（760年）と「神功開寶」（765年）が入っていたと報告されている。蓮華文を飾った陶棺はほかに，岡山県真庭市（落合町）下一色古墳があるくらいである（村上1980）。

本坊山古墳の陶棺は遺体をそのまま納めることができる「大」グループのもので，福田の背戸の山古墳のものは８世紀中頃の火葬骨用の「中」グループの陶棺ではあるが，陶棺と火葬と仏教文化，７世紀末～８世紀代の備前邑久窯跡群周辺の様相を知ることができる貴重な資料である。

次に，長船町桂山十二ヶ畝５号墳は発掘調査で陶棺が納められた状況を確認できた貴重な古墳である。約7.5×6.5mの方墳で南側に幅8.7mのテラスがつく。内部主体は長さ約４m，奥壁側での幅約1.1mの無袖横穴式石室である。陶棺は須恵質切妻家形陶棺で２分割されたもので，身は２つ合わせて全長167cm，幅50cmである。

陶棺の作り方では，基本的にヘラケズリ，または板状の工具によるナデ，普通のナデで仕上げられており，タタキなどははっきりしない。共伴遺物は７世紀末～８世紀前半の須恵器杯類があり，石室の内外から窯壁が十数点出土している。須恵器生産に関わる人物がこの陶棺に納められていたと考えられている。この桂山十二ヶ畝５号墳の陶棺も遺体を伸展葬でそのまま納めることができる「大」グループのもので，寒風窯跡群の「大」グループ陶棺と同じように７世紀末～８世紀前半のものである。

備前市惣田奥４号墳は，もともと６mほどの小円墳で，長さ3.6m，幅約１mの無袖横穴式石室の奥の方に須恵質切妻家形陶棺が置かれていた。身の長さ76cm，幅29～31.8cmの「中」グループのものである。この大きさでは遺体をそのまま納めることは難しいと考えられていたが，実際に火葬骨が確認されている。そして薬壺形短頸壺が追葬されており，こちらも火葬骨が納められていた。

８世紀初め頃に，火葬骨を納めた陶棺用に無袖横穴式石室墳が築かれ，８世紀中頃に火葬骨を納めた薬壺形の短頸壺が追葬されたようである。

これまで陶棺の大きさから長さ80cmほどのものは火葬骨を納めたのではないかと述べてきたが，間壁らの調査によってそれが確認できた。そして備前南東部地域においては８世紀前半にも火葬骨を納めた陶棺を納める横穴式石室墳が確認でき，全国的にも横穴式石室墳の築造が８世紀前半まで続くことが確認できている（間壁1982b）。また，700年に僧道昭が初めて火葬されたという記録からさほど遠くない時期に，この備前南東部地域で火葬が行われていたということも極めて重要である。この惣田奥４号墳の調査は７世紀末～８世紀前半の陶棺のあり方，火葬のあり方などを教えてくれる貴重な成果である。

また，この惣田奥古墳群では，12基のうち５基の古墳で陶棺が使用されている。５号墳で大き目の須恵質切妻家形陶棺，８号墳で須恵質陶棺，10号墳で２分割の大きめの須恵質切妻家形陶棺片と骨蔵器に使用されたと推測される小さめの切妻家形陶棺，11号墳で須恵質切妻家形陶棺と推測されるものが出土している。陶棺をおもに使用した古墳群ということができるのかもしれない。さらに，この古墳群の近くには火葬墓群があり，７世紀末頃から継続して平安時代まで造墓され続けたことがわかる。

ちなみにこの古墳群が築かれた備前市佐山地域は７世紀末頃，おもに８世紀に入る頃から須恵器窯が築かれ始め，平安時代半ば頃までは備前邑久窯跡群の須恵器生産の中心地であったといっても過言ではない地域である（伊藤1987，亀田ほか2014・2021）。

このような陶棺を比較的多く使用した古墳群として，長船町亀ヶ原古墳群がある。約30基の亀ヶ原古墳群のうち７基で陶棺を確認している。「南」を刻んだ陶棺を納めた水落古墳もこの亀ヶ原古墳群の南側に近接して位置している。桂山十二ヶ畝５号墳や西山・札崎古墳群もさほど離れていない。

これらの陶棺使用古墳の被葬者に関しては，古くから須恵器生産との関わりが指摘されているが，今回取り上げた古墳群では，桂山十二ヶ畝５号墳，惣田奥４号墳で，窯壁が出土しており，西山・札崎古墳群では，陶製無文当て具と推測されるものが出土している。長船町の西須恵・東須恵は古代邑久郡の須恵郷に属していたと考えられ，桂山十二ヶ畝５号墳，西山・札崎古墳群，亀ヶ原古墳群などはすべてこの須恵郷の古墳であり，具体的な窯壁など考古資料がなくとも，何らかの形で須恵器生

産に関わっていたことは十分推測できる。

備前邑久窯跡群および周辺古墳群で出土する陶棺

以上，陶棺の様子がわかる例をいくつかあげたが，それら以外の破片も含めてその特徴をまとめると，すでに間壁忠彦・間壁葭子らを中心として，多くの方々が指摘しているように「須恵質切妻家形陶棺」がこの地域の陶棺の代表例であろう。「須恵質」「切妻家形」，外面に斜格子などのタタキ痕跡を残し，内側に同心円文当て具痕跡を残す，いわゆる「須恵器のタタキ作り」，「ロクロ成形の脚」などがキーワードとなり，また，屋根と身の合わさる部分が平坦なものが多いようである。

また，少ないながらも寄棟家形陶棺が新林（宮嵶）窯跡で出土し，長船町磯上でも出土している。

一方で，新山２号窯跡や花尻南窯跡群では以上のものとは明らかに異なる様相の陶棺片と推測されるものが出土している。破片が小さく，不確実な部分もあるが，これらが陶棺で良ければ，前述のこの地域の陶棺とは異なる陶棺が須恵器窯跡で生産されたことになり，今後，備前邑久窯跡群周辺の古墳でこのような特異な陶棺が見つかるのかもしれない。

また，旧町別に古墳出土例をみると，牛窓町が３ヵ所，邑久町が６ヵ所，長船町が27ヵ所，備前市が15ヵ所，岡山市が１ヵ所である。長船町が最も多く，次いで備前市である。長船町の多くは古代須恵郷の中にあったと考えられる亀ヶ原古墳群などで多く使用されたことに起因すると思われる。また，備前市の多さの理由については，一つは８世紀代の窯が多く築かれている佐山地域に惣田奥古墳群があることによるのであろうが，それ以外の地域に広がっていることも興味深い。一方，牛窓町では寒風窯跡群周辺で採用されていることは素直にうなずけるが，それ以外の牛窓地域の古墳群で陶棺がほとんど使用されていないことも興味深い。この地域では塩生産が大きな産業であるが，塩生産に関わる人々は陶棺を使用しなかったのであろうか。

陶棺のサイズについて，この備前邑久窯跡群周辺の例では，細かな検討はしていないが，遺体を伸展葬で納めることができる長さ130cm以上を「大」とした。これは２分割されたものが多く，窯内での焼成との関係があると思われる。「中」は，長さ50～130cmのものとし，基本的に２分割せずに焼成しているが，一部２分割のものもあるようである。身体の小さな人物や小児であれば伸展葬で納めることは可能であろうが，一般的な大きさの人物であれば，伸展葬で遺体を納めるのが難しく，おもに火葬骨用のものと考えている。そして長さ50cm以下を「小」とした。

表１の一覧表の中から大まかに大きさが推測できるものをあげると，21例あり，そのうち「大」が10例，「中」が９例，「小」が２例である。「大」と「中」がほぼ同数で，「小」２例である。

時期的には，わからないものが多いが，大きさが推測できるものは７世紀末～８世紀前半のものが多く，少なくとも「大」の寒風１－Ⅰ号窯跡例，本坊山古墳例，桂山十二ヶ畝５号墳例はこの時期であり，７世紀末～８世紀前半に遺体を伸展葬で納めることができる陶棺が存在したことは間違いない。一方，「中」の惣田奥４号墳，大城谷北窯跡例も共伴する須恵器から同じ７世紀末～８世紀前半であり，この時期に伸展葬できる「大」の陶棺と火葬骨を納めたと推測される「中」の陶棺がおそらく多少時間差をもちながらも共存したことが推測できるのである。

このように，この地域の陶棺の検討によって，この地域の横穴式石室墳がいつまで残るのか，火葬がいつから始まるのかなど，この地域の古墳文化研究が可能なのである。

また，この地域では長さ50cm以下の脚付きの小型陶棺（骨蔵器）は岡山市邑久郷内山奥資料がある（近藤・角田1956）。別に８世紀後半の佐山新池１号窯跡で出土した家形のものは壁の厚さが約１cmしかなく，陶棺とするよりは瓦塔や家形骨蔵器と考えたほうがよさそうであるが，ひとまず表に加えている。

さらに，表には加えていないが，寒風窯跡群で小型鴟尾が出土しており（牛窓町1997，p.246），瓦塔（陶製仏殿）の鴟尾である可能性がある。備前邑久窯跡群周辺での瓦塔は，長船町須恵廃寺と岡山市吉井廃寺で採集されている（宇垣1985，亀田2002）。佐山新池１号窯跡のものとは特徴が異なる。今後，備前邑久窯跡群のどこかの窯跡でみつかるかもしれない。

備前邑久窯跡群で生産された陶棺がどの地域まで運ばれたのかについてはほとんどわかっていない。これまで述べてきたように備前邑久窯跡群周辺の古墳に使用されたことは間違いないと思うが，岡山県内のどこまで広がったのかについてはわからない。

山口県山口市幸崎Ｂ地区１号墳の陶棺は，須恵質切妻家形陶棺で，外面に平行タタキのあとのハケ目，内面にナデで消し残された同心円文当て具痕跡があり，屋根の妻部に円孔をあけている。共伴する須恵器は７世紀末～８世紀初めのものがある。間壁葭子も指摘するように邑久から海上を運ばれた可能性はある（山口県1973，間壁1982a：p.33上から８行目）。ちなみにこの幸崎Ｂ地区１号墳は山口市の南部，秋穂二島にあり，この幸崎は天平17（745）年の年号が記された平城宮出土調塩木簡の「周防国吉敷郡神前郷」に比定されている（渡辺2000）。山口県の土器製塩遺跡として有名な美濃ヶ浜遺跡は南約４kmの場所である。

この幸崎Ｂ地区１号墳の陶棺は，詳細は胎土分析などを行わないとわからないであろうが，山口県内でほとん

ど見ることができない須恵質切妻家形陶棺が，備前邑久郡と同じように都に塩を納めていた地域でみられることは大変興味深いことである。ただ，前述のように邑久郡地域で塩作りの中心地であった牛窓地域で陶棺がほとんど使用されていないこととは整合しないようである。

（２）鴟尾

寒風窯跡群を中心とした岡山県の鴟尾に関しては，1980年，大脇潔が中心となって行った飛鳥資料館の特別展示『日本古代の鴟尾』で作成された図録が基準となって研究が進められるようになった。

その後，2005～2008年に行われた寒風窯跡群の発掘調査をもとに馬場昌一が中心となって『史跡寒風窯跡群』（瀬戸内市2009）をまとめ，その中で鴟尾に関しても再整理された。さらに，2017年に大脇潔が自身の寒風窯産鴟尾に関する研究をすすめ，寒風産鴟尾の流通のあり方，「出職」工人の問題などについて整理した。2020年に奈良文化財研究所で鴟尾に関するシンポジウムが開催され，香川将慶らが山陽・四国地方の鴟尾について発表した（香川ほか2020）。その中で，白石純が岡山と香川の鴟尾を胎土分析し，香川の多くの鴟尾が寒風窯跡群を含んだ備前邑久窯跡群の鴟尾の胎土と同じグループに入ることを明らかにした。ただ，白石はこれらすべてが寒風産なのか，再検討の必要性について述べている。

以上のように，備前邑久窯跡群で生産された鴟尾に関しては，寒風窯跡群とその周辺で生産された鴟尾の検討を進める中で，どこに運ばれたのか，工人の移動があったのかなどが現在の課題となっている。

以上のような考古学的な検討と蛍光Ｘ線分析法による検討によって，現時点では，図８にあげた備前服部廃寺（３）・幡多廃寺（４）・賞田廃寺（５～10）の鴟尾が備前邑久窯跡群から運ばれたと考えられ，遠く大和奥山廃寺（15）（箱崎・西川2002，白石2020a），摂津細工谷遺跡（16）（大阪市1999，白石2001）にも運ばれたと考えられている。

一方，香川県内で出土する鴟尾に関しても，川畑聡（1996）や大脇潔（1999）らが寒風窯跡群との関係を述べていたが，2020年の白石純の分析によって，胎土が同じグループに入ったもののなかに寒風窯跡群から運ばれたものがあることは間違いないであろうが，同じグループと判断されたさぬき市末窯跡出土資料も運ばれたと考えていいのか，再検討の必要性を説いている。大脇潔が述べた「出職」工人の存在は今後の課題であろう。

いずれにせよ，寒風窯跡群を中心として生産された鴟尾が同じ備前国だけでなく，讃岐国に運ばれ，さらに遠く大和国や摂津国に運ばれていることは極めて重要な意味を持っていると考えている。

一方，備前邑久窯跡群内のことであるが，まず，「寒風産鴟尾」「寒風系鴟尾」などという用語がよくつかわれるが，この用語によって寒風窯跡群全体で作られた鴟尾というイメージがある。しかし，瀬戸内市の調査によって確実に鴟尾を生産しているのは１－Ｉ号窯跡のみである可能性が確認されており，これは重要である。また，類似した鴟尾が出土した切明窯跡は寒風３号窯跡から250mの距離であり，広い意味での寒風窯跡群でもよいかと思う。

しかし，新林（宮嵶）窯跡に関しては，約１km離れている。前述したように同じＣ類の木葉文であっても寒風１号窯跡群のものは中央の稜線が面で表現されているのに対して，新林（宮嵶）窯跡例は中央にヘラで線が描かれている。細かな話ではあるが，摂津細工谷遺跡の鴟尾の木葉文もヘラで線が描かれている。この違いに意味があるならば，摂津細工谷遺跡の鴟尾は新林（宮嵶）窯跡産の可能性が強くなるのである。

また，備前邑久窯跡群での鴟尾生産は新林（宮嵶）窯跡も含めて広義の寒風窯跡群で生産されているということもできるが，１ヵ所備前市大城谷南窯跡で採集されていると報告されている。この離れた１ヵ所についてどのように理解すればいいのか，気になるところである。

陶棺は備前邑久窯跡群の各小地域の窯で生産されているが，鴟尾は基本的に寒風窯跡群周辺にまとまって生産されている。この違いには意味がありそうである。

５．おわりに

これまで述べてきたように備前邑久窯跡群は，６世紀中頃に瀬戸内市木鍋山窯跡が操業を開始し，12世紀，現在の備前市伊部地域に移るまでの約550年間に旧の邑久郡地域（現在の瀬戸内市・備前市）に営まれた須恵器窯跡群である。約130基確認されているが，発掘調査されたものは12基しかなく，その実態はいまだよくわかっていない。

小稿はこれらの窯跡で生産されたと推測される須恵器以外のやきもの，陶棺と鴟尾について整理してきた。

まず，陶棺に関しては，寒風系，寒風タイプなどいくつかの呼び方があるが，基本的に「須恵質切妻家形陶棺」がこの地域の陶棺の代表例であろう。「須恵質」「切妻家形」，外面に斜格子などのタタキ痕跡を残し，内側に同心円文当て具痕跡を残す，いわゆる「須恵器のタタキ作り」，「ロクロ使用の脚」などが特徴である。屋根と身の合わさる部分が平坦なものが多いようである。また，少ないながら寄棟家形陶棺も出土している。

一方で，新山２号窯跡や花尻南窯跡群では以上のものとは明らかに異なる様相の陶棺片と推測されるものが出土している。破片が小さく，不確実な部分もあるが，陶棺で良いのであれば，前述のこの地域の陶棺とは異なる陶棺が須恵器窯跡で生産されたことになり，多様性も今

後の課題であるといえる。そして，７世紀前半の新山２号窯跡例が現段階では最も古く，備前邑久窯跡群の「須恵質切妻家形陶棺」が成立するのは７世紀後半になるのであろうか。

陶棺が生産された時期は，不確実な部分もあるが，ひとまず７世紀前半から８世紀前半まで，生産された地域は，瀬戸内市内の牛窓町・邑久町・長船町，備前市の各地域で，その供給先は周辺地域の古墳のようである。つまり供給先はあまり広がっていないようである。

これに対して，鴟尾が生産された窯跡は広義の寒風窯跡群と１ヵ所離れた備前市大城谷南窯跡である。このあり方は今後鴟尾が焼かれた窯跡がさらに発見されるのか，それともやはり中心が寒風窯跡群であることは動かないのか，注目しておきたい。

古代邑久郡地域の寺院は不確実なものも含めて，５，６ヵ所あるが，地元産の鴟尾が使用されているのは服部廃寺のみである。そして西の備前中枢部の賞田廃寺と幡多廃寺で使用されたと推測されている。今後，供給先の寺院は増加すると思うが，現状のあり方は，これまで検討してきた備前邑久窯跡群産須恵器・陶硯などのあり方とも類似しており，この鴟尾の分布は意味があるものと思われる。

さらに，鴟尾が大和奥山廃寺や摂津細工谷遺跡に運ばれていることも重要である。これまでの備前邑久窯跡群で生産された須恵器を検討してきた結果，７世紀中頃から飛鳥地域や難波地域へ備前邑久窯跡群産の須恵器が供給され始めたことが推測できている（白石2001，亀田2020b）。備前邑久窯跡群の須恵器生産における器種構成の変化は７世紀中頃に都との関わりの中で動き始めたことが推測できている。

大和や摂津への鴟尾の供給もこのような備前邑久窯跡群における須恵器の生産と流通，都と備前邑久窯跡群の関係の中で理解できるのかもしれない。

備前邑久窯跡群内のそれぞれの地域で生産し，その周辺地域に供給したと推測される陶棺と，限定された地域の窯で生産し，限定された地域に供給された鴟尾。

筆者たちが2001年から発掘調査してきた佐山新池１号窯跡，佐山東山窯跡，庄田工田窯跡の須恵器を見ていると，良質の胎土で緑色の自然釉がかかった「上物」，そこまではないが，比較的良好な胎土で作られた陶硯，大型の盤，洗，大型甕など一般の人々が日常的には使わず，役所などに供給されたと推測されるもの，そしてあまり胎土の良くない杯類，壺・甕類など，大きく３グループにわけることができるのではないかと考えている。

上物と中くらいのものは都や備前国府などへ，中くらいから下のものは地元で消費されたのではないかと考えている。

鴟尾はまさにこの「上物」と中くらいのもの，陶棺は地元用のものとして生産されたのかもしれない。

筆者はこれまで，備前地域と屯倉との関わりを検討したことがある（亀田2019）。この備前邑久郡地域に関しては，須恵器生産・塩生産などにおいて屯倉を通した中央との関係を推測しているが，６，７世紀の屯倉との関係がその後の鴟尾の生産と供給にも関係しているのかもしれない。

山口県で出土している須恵質切妻家形陶棺，香川県で見つかっている鴟尾などについてはあらためて検討してみたい。

小稿をなすにあたり，下記の方々にいろいろとお世話になりました。末筆ながら記して謝意を表します。敬称は省略させていただきました（五十音順）。
石井啓，伊藤晃，大谷博志，大脇潔，白石純，徳澤啓一，馬場昌一，三阪一徳，森内秀造，横山聖，若松挙史

註

（１）備前邑久窯跡群に関する代表的な研究・調査成果としては以下のものがある。西川・間壁1970，伊藤1987，亀田・能美2002，亀田2006h，牛窓町史編纂委員会1997，長船町史編纂委員会1998，邑久町史編纂委員会2006など。

（２）亀田2015・2017・2018・2020b，亀田・横山2013，亀田・平山2016，長尾・亀田2019などがある。

（３）小稿では，陶棺のサイズについて，仮に，遺体を伸展葬で納めることができ，長さがおおよそ130cm以上のものを「大」，それより小さく，伸展葬で遺体を納めることが難しい，おおよそ130～50cmのものを「中」，さらに小さい，長さ50cm以下のものを「小」としておく。

幅に関しては，上記の長さの基準と同じように遺体を伸展葬で納めるときの肩幅が目安になり，30cm以上を「大」と考えるが，「中」でも40cm前後のものがあり，明確な区別は難しそうである。

（４）『続日本紀』文武天皇４（700）年３月己未（10日）条。「道照和尚物化。・・・中略・・・。火葬於粟原。天下火葬従此而始也。・・・後略・・・」（青木和夫ほか校注1989『続日本紀』新日本古典文学大系12，岩波書店，22-27）。ここでは「道照」であるが，『日本書紀』などでは「道昭」とある。

（５）長船町蟻４号墳例は，本文中にも記したように土師質の陶棺で良いのではないかと考えている。このように書く理由は，これまで本文中に何度も書いてきたように，須恵質陶棺といっても，部分的に土師質に焼き上がるものは多い。破片のみでは，本来須恵質か土師質か区別ができないものが多いからである。タタキ成形のものであれば，タタキや当て具の痕跡があり，多少区別しやすいが，ナデのものであれば，区別しづらいからである。

参考文献

池田浩1998a「29　桂山十二ヶ屺５号墳」『長船町史　史料編（上）』長船町，193-202

池田浩1998b「31　亀ヶ原古墳群」『長船町史　史料編（上）』長船町，217-226

池田浩1998c「35　花尻南窯跡群」『長船町史　史料編（上）』長船町，241-250

池田浩1998d「40　奥池中池１・２号窯跡」『長船町史　史料編（上）』長船町，260-263

池田浩1998e「42　亀ヶ原１号窯跡」『長船町史　史料編（上）』長船町，266-268

池田浩1998f「48　服部廃寺」『長船町史　史料編（上）』長船町，304-322

池田浩1998g「52　生砂（産土）池窯跡」『長船町史　史料編（上）』長船町，336-343

池田浩1998h「53　新池窯跡」『長船町史　史料編（上）』長船町，344-345

池田浩1998i「54　正伝名池窯跡」『長船町史　史料編（上）』長船町，346-348

池田浩1998j「55　油杉窯跡群」『長船町史　史料編（上）』長船町，349-353

伊藤晃1974『新林（宮嵶）窯址の調査報告』邑久町教育委員会・東備西播道埋蔵文化財包蔵地調査委員会

伊藤晃1982「備前市佐山大城谷北窯採集の小形陶棺と須恵器」『倉敷考古館研究集報』17，倉敷考古館，49-53

伊藤晃1987「第11章　窯業」近藤義郎編『岡山県の考古学』吉川弘文館，531-588

宇垣匡雅1985「須恵廃寺採集の瓦」福田正継編1985『西谷遺跡』長船町教育委員会，巻末1-12

牛窓町史編纂委員会編1997『牛窓町史　資料編Ⅱ』牛窓町

梅原末治1952「古瓦についての一二の覚書」『史迹と美術』226，史迹美術同攷会，282-288

江見正己1998a「17　金鶏塚古墳」『長船町史　史料編（上）』長船町，101-108

江見正己1998b「18　亀ヶ原大塚古墳」『長船町史　史料編（上）』長船町，109-111

大河内栄子・福田正継・白石純2017「岡山県熊山遺跡群採集遺物について」『半田山地理考古』５，岡山理科大学地理考古学研究会，35-54

（財）大阪市文化財協会1999『細工谷遺跡発掘調査報告Ⅰ』

大脇潔1999『鴟尾』日本の美術392，至文堂

大脇潔2017「寒風窯産鴟尾再考」『窯跡研究会第16回研究会　岡山県備前市佐山東山窯にかかる須恵器窯の大型化をめぐる地域事例報告および備前焼の窯構造』窯跡研究会，19-26

岡山県教育委員会1978『寒風窯址群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告27

岡山県古代吉備文化財センター2003a『改訂岡山県遺跡地図　第６分冊岡山地区』岡山県教育委員会

岡山県古代吉備文化財センター2003b『改訂岡山県遺跡地図　第９分冊東備地区』岡山県教育委員会

岡山市教育委員会文化課1975『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市遺跡調査団

岡山市教育委員会2004『ハガ遺跡』

岡山市教育委員会2005『史跡賞田廃寺跡』

邑久町教育委員会2001『邑久町遺跡地図』

邑久町史編纂委員会編2006『邑久町史　考古編』瀬戸内市

長船町教育委員会1987『長船町埋蔵文化財分布地図』

長船町教育委員会1997『服部廃寺』

長船町史編纂委員会編1998『長船町史　史料編（上）』長船町

長船町史編纂委員会編2001『長船町史　通史編』長船町

香川将慶・妹尾周三・岡本治代・白石純2020「５　山陽・四国地方の鴟尾」『第20回シンポジウム　鴟尾・鬼瓦の展開Ⅰ－鴟尾－発表要旨』奈良文化財研究所，131-153

亀田修一1997a「51　寒風窯跡群」『牛窓町史　資料編Ⅱ』牛窓町，234-246

亀田修一1997b「52　切明窯跡」『牛窓町史　資料編Ⅱ』牛窓町，247-250

亀田修一1997c「57　古市村窯跡（だんがめ山窯跡）」『牛窓町史資料編Ⅱ』牛窓町，259-260

亀田修一1998a「19　大塚古墳群」『長船町史　史料編（上）』長船町，112-151

亀田修一1998b「25　蟋古墳群」『長船町史　史料編（上）』長船町，170-181

亀田修一1998c「30　西山･札崎古墳群」『長船町史　史料編（上）』長船町，203-216

亀田修一1998d「32　西須恵宮ノ尻出土異形陶棺」『長船町史　史料編（上）』長船町，227-228

亀田修一1998e「47　須恵廃寺」『長船町史　史料編（上）』長船町，282-303

亀田修一2002「吉備の瓦塔」『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』下巻，古代吉備研究会，429-454

亀田修一2006a「35　水落古墳」『邑久町史　考古編』瀬戸内市，476-481

亀田修一2006b「72　新山２号窯跡・サザラシ１号墳」『邑久町史考古編』瀬戸内市，716-725

亀田修一2006c「73　天堤窯跡」『邑久町史　考古編』瀬戸内市，726-727

亀田修一2006d「75　さざらし奥池窯跡」『邑久町史　考古編』瀬戸内市，729-733

亀田修一2006e「77　工田窯跡」『邑久町史　考古編』瀬戸内市，735-736

亀田修一2006f「78　新林（宮嵶）窯跡」『邑久町史　考古編』瀬戸内市，737-745

亀田修一2006g「79　切明窯跡」『邑久町史　考古編』瀬戸内市，746-748

亀田修一2006h「第６章　邑久古窯跡群　邑久古窯跡群概説」邑久町史編纂委員会編『邑久町史　考古編』瀬戸内市，697-703

亀田修一2015「備前邑久窯跡群出土文字資料に関する覚書」『半田山地理考古』３，岡山理科大学半田山地理考古学研究会，65-79

亀田修一2017「土師器を須恵器窯で焼くことに関する覚書－備前

佐山東山窯跡群資料を対象として－」『半田山地理考古』５，岡山理科大学半田山地理考古学研究会，27-34
亀田修一2018「備前邑久窯跡群の須恵器甕に関する覚書」『半田山地理考古』６，岡山理科大学半田山地理考古学研究会，73-96
亀田修一2019「考古学からみた備前地域の屯倉」『シンポジウム記録集２　赤磐市史跡シンポジウム　両宮山古墳以後－古墳時代後期の赤磐と倭王権－』赤磐市教育委員会，105-126
亀田修一2020a「無文当て具に関する覚書」『福岡大学考古学論集３－武末純一先生退職記念－』武末純一先生退職記念事業会，301-319
亀田修一2020b「備前邑久窯跡群出土須恵器の器種構成に関する覚書」『半田山地理考古』８，岡山理科大学半田山地理考古学研究会，41-67
亀田修一・大谷博志1998「27　山崎７号墳（本坊山古墳）」『長船町史　史料編（上）』長船町，185-191
亀田修一・白石純・徳澤啓一編2014『備前邑久窯跡群の研究』岡山理科大学考古学研究室
亀田修一・白石純・徳澤啓一・三阪一徳編2021『備前邑久窯跡群の研究２』岡山理科大学考古学研究室
亀田修一・能美洋介2002「一　窯は動く」岡山理科大学『岡山学』研究会編『備前焼を科学する』シリーズ『岡山学』１，吉備人出版，6-21
亀田修一・平山晃基2016「岡山県内古代陶硯に関する覚書」『半田山地理考古』４，岡山理科大学半田山地理考古学研究会，103-124
亀田修一・横山聖2013「かえりを有する輪状つまみ杯蓋小考－岡山県佐山新池１号窯跡出土例を中心に－」『半田山地理考古』１，岡山理科大学半田山地理考古学研究会，19-32
川畑聡1996「古代讃岐の鴟尾」『香川考古』５，香川考古刊行会，61-82
絹畠歩2013「古墳時代後期から終末期における陶棺の分類・編年と系統－「土師系陶棺と須恵系陶棺」－」『古代学研究』198，古代学研究会，1-24
絹畠歩2016「「吉備」地域における陶棺の採用過程とその論理」田中良之先生追悼論文集編集委員会編『考古学は科学か』下，中国書店，697-716
京都大学1968『考古学資料目録』２
草原孝典2004「出土瓦について」『ハガ遺跡』岡山市教育委員会，109-116
葛原克人1975『奥更谷古窯址の調査報告－東備西播有料道路建設に伴う－』邑久町教育委員会
熊山町文化協会1974『熊山遺跡』
倉林眞砂斗2005『石棺と陶棺』吉備考古ライブラリィ12，吉備人出版
神原英朗編1976『岩田古墳群』岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報６，山陽団地埋蔵文化財調査事務所
近藤義郎1955「岡山県邑久郡美和村の一窯址」『日本考古学年報』３，誠文堂新光社
近藤義郎・角田茂1956「小形陶棺の新資料」『私たちの考古学』10，考古学研究会，17-20
酒井清治2002「第３章　須恵器生産の展開　第５節　北武蔵の歴史時代須恵器の系譜」『古代関東の須恵器と瓦』同成社，194-223（初出は，1986）
白石純2001「原始･古代　第３章　古墳の時代－古代国家への道－３　科学が語る須恵器・瓦（鴟尾）の移動」牛窓町史編纂委員会編『牛窓町史　通史編』牛窓町，163-182
白石純2020「５　山陽・四国地方の鴟尾　Ｈ　岡山県・香川県出土鴟尾の胎土分析」『第20回シンポジウム　鴟尾・鬼瓦の展開Ⅰ－鴟尾－発表要旨』奈良文化財研究所，141-144
白石純・清野孝之・道上祥武2020「１　奈良の鴟尾　Ｄ　奥山廃寺出土鴟尾の産地について」『第20回シンポジウム　鴟尾・鬼瓦の展開Ⅰ－鴟尾－発表要旨』奈良文化財研究所，14-16，27-29
杉山尚人1987「陶棺の研究」『考古学研究』33－４，考古学研究会，49-71
杉山尚人1992「29　陶棺」近藤義郎編『吉備の考古学的研究』山陽新聞社，287-304
瀬戸内市教育委員会2009『史跡寒風古窯跡群－史跡整備に伴う確認調査－』瀬戸内市埋蔵文化財発掘調査報告１
高松市教育委員会2009『片山池窯跡群』
田代健二1988「備前市内採集の遺物について」『古代吉備』10，古代吉備研究会，75-93
時實黙水1934「通信欄」『吉備考古』23，吉備考古会
長尾早江子・亀田修一2019「須恵器車輪文当て具文様に関する覚書－西日本を中心に－」『半田山地理考古』７，岡山理科大学半田山地理考古学研究会，47-96
中野雅美2006「87　福谷湯通窯跡」『邑久町史　考古編』瀬戸内市，776
中村展子2004「生産からみた陶棺の変容とその背景」『洛北史学』６，洛北史学会，75-101
中村浩1982「奈良前期の須恵器生産」『日本書紀研究』12，塙書房，255-285
永山卯三郎1930『岡山県通史』岡山県通史刊行会
奈良国立文化財研究所1980『日本古代の鴟尾』飛鳥資料館図録７
新納泉・尾上元規編1995『定北古墳』岡山大学考古学研究室
西川宏・間壁忠彦1970「備前の古窯」近藤義郎・上田正昭編『古代の日本　第４巻　中国・四国』角川書店，293-311
箱崎和久・西川雄大2002「奥山廃寺（奥山久米寺）の調査－第114-８次」『奈良文化財研究所紀要2002』奈良文化財研究所，72-74
菱田哲郎1988「鴟尾の生産と地域色－東播系と西播系の鴟尾－」『古代文化』40-６，古代学協会，22-28
備前市教育委員会2003『伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書』備前市埋蔵文化財調査報告５
備前市教育委員会2012『医王山東麓窯跡群発掘調査報告書』備前市埋蔵文化財調査報告９
福田正継編1985『西谷遺跡』長船町教育委員会
間壁忠彦1981「邑久郡西須恵出土の異形陶棺形品」『倉敷考古館研究集報』16，倉敷考古館，28-32
間壁忠彦1991『備前焼』考古学ライブラリー60，ニュー・サイエ

ンス社
間壁忠彦・間壁葭子1981「岡山県下の奈良・平安期墳墓集成」『倉敷考古館研究集報』16，倉敷考古館，53-75
間壁忠彦・間壁葭子1982「惣田奥４号墳」『倉敷考古館研究集報』17，倉敷考古館，1-17
間壁葭子1982a「切妻家形陶棺」『倉敷考古館研究集報』17，倉敷考古館，17-36
間壁葭子1982b「８世紀における古墳継続使用について」『倉敷考古館研究集報』17，倉敷考古館，36-49
間壁葭子1982c「寒風古窯址出土須恵質切妻陶棺略図」『倉敷考古館研究集報』17，倉敷考古館，53
間壁葭子1983「岡山の陶棺－白猪屯倉への一私見－」『岡山の歴史と文化』藤井駿先生記念論文集，福武書店，41-72
間壁葭子1992『吉備古代史の基礎的研究』学生社
丸亀市教育委員会2002『田村遺跡発掘調査報告書』
光本順2001「６・７世紀における陶棺の変容とその特質」新納泉・光本順編『定東塚・西塚古墳』岡山大学考古学研究室，257-290
宮岡昌宣2010「吉備の陶棺」『広島大学大学院文学研究科　帝釈峡遺跡群発掘調査室年報XXIV・考古学研究室紀要第２号』広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室・考古学研究室，95-120
宮岡昌宣2012「陶棺からみる畿内と吉備」『考古学研究』59-１，考古学研究会，60-79
村上幸雄編1980『糠山遺跡群Ⅱ』久米開発事業に伴う埋蔵文化財調査報告（２），久米開発事業に伴う埋蔵文化財調査委員会
村上幸雄1987a「17　石棺と陶棺」近藤義郎・河本清編『吉備の考古学』福武書店，328-342
村上幸雄1987b「第６章　古墳時代後期」近藤義郎編『岡山県の考古学』吉川弘文館，293-350
守時桂太1936「陶棺と古銭発掘の文献」『吉備考古』28，吉備考古会
守時桂太1953「備前熊山南麓の瓦」『吉備考古』86，吉備考古学会
山口県文化課調査係1973『幸崎古墳』山口県埋蔵文化財調査報告14，山口県教育委員会
横田美香1996「吉備地域の家形陶棺の系列と編年」『古代吉備』18，古代吉備研究会，60-68
横田美香2003「吉備地域の土師質亀甲形陶棺」『古代吉備』24，古代吉備研究会，39-50
若林勝邦1892「美作及び備前の陶棺」『東京人類学会雑誌』７-76，東京人類学会，321-326
渡辺一雄2000「135　幸崎古墳群」『山口県史　資料編　考古１』山口県，499-500

引用挿図（いずれも一部改変引用）

図２－１～４，図３－11・12，図６－１～９，図７－１～７，図８－１・２・18～19：瀬戸内市2009，図２－５～10：間壁1982c，図３－１：亀田1997c，図３－２・３・13：亀田2006b，図３－４：亀田2006f，図３－５・６：池田1998c，図３－７～９：亀田ほか2014，図３－10：伊藤1982，図３－14～18：亀田1998c，図４－１：亀田2006a，図４－２～４：亀田・大谷1998，図４－５～９：池田1998a，図５－１～16：池田1998b，図５－17：亀田1998b，図５－18：間壁1981，図５－19～21：間壁夫妻1981，図５－22：間壁夫妻1982，図７－８・９：亀田1997b，図７－10・11：亀田2006f，図８－３・17：池田1998f，図８－４：岡山市1975，図８－５～10：岡山市2005，図８－11～14：香川ほか2020，図８－15：箱崎・西川2002，図８－16：大阪市1999

連絡先
【亀田修一　〒700-0005　岡山市北区理大町1-1
岡山理科大学生物地球学部考古学研究室】

表１　備前邑久窯跡群の陶棺・鴟尾一覧表

［陶棺出土窯跡］

遺跡名	所在地	時期	陶棺の概要	共伴資料	備考	参考文献
寒風１－Ⅲ号窯跡	瀬戸内市牛窓町長浜	窯跡の須恵器は７世紀前半	須恵質家形陶棺：２分割，身（外面：斜格子タタキ，内面：ヨコヘラケズリ，側面長86.4cm，復元長172.8cm，高さ43.2cm，厚さ2.8cm），脚はないが，身の底部外面に直径13.8cmの円形脚の痕跡。「大」。	須恵器（杯，高杯，台付椀，壺，甕）	上層土坑出土であり，１－Ⅰ号窯跡資料か。	瀬戸内市2009
寒風１－Ⅱ号窯跡	瀬戸内市牛窓町長浜	窯跡の須恵器は７世紀前半～中葉	須恵質陶棺：身（外面：ヘラケズリ，内面：ヘラケズリ後ナデ，側面高47.5cm，厚さ4.5～5.7cm），脚（方形：上部幅12.0～12.5cm，下部幅13.0～14.5cm，高さ14.5～15.0cm。直径約12cm，高さ約14.5cmの円筒を内面同心円文当て具，外面格子状タタキで作り，その後，三角柱状粘土貼り付け，板ナデで方柱に作る）。「大」。	須恵器（杯，高杯，壺，甕，硯），上層埋土で鴟尾Ａ類	焼成部上層出土であり，１－Ⅰ号窯跡資料か。	瀬戸内市2009
寒風１－Ⅰ号窯跡	瀬戸内市牛窓町長浜	７世紀末～８世紀前半	須恵質家形陶棺：屋根（切妻？，格子タタキのあとハケ調整，棟は幅５cm，高さ約６mm，屋根復元幅約68cm，身の復元幅約63cm：「大」）。身（凸帯部に格子タタキ，焼成不良）。	須恵器（杯，高杯，壺，甕，硯），鴟尾Ａ類	焚き口部出土。	瀬戸内市2009
寒風２号窯跡	瀬戸内市牛窓町長浜	７世紀中葉～８世紀前半	詳細不明。	須恵器（杯，台付椀，鉢，平瓶，瓶，こね鉢，甕，硯），小型鴟尾（瓦塔？），鴟尾	詳細不明。	瀬戸内市2009，村上1980，亀田1997a
寒風窯跡群	瀬戸内市牛窓町長浜	７世紀末～８世紀前半？	図２－６の身幅50cm：「大」，図２－８の屋根による身幅29cm：「中」，ほかに脚など。		時實黙水採集資料で，牛窓町歴史民俗資料館に保管されていたもの。これらも１－Ⅰ号窯跡製品？	間壁1982c，p.53
古市村窯跡	瀬戸内市牛窓町長浜	７世紀末～８世紀前半	須恵質家形陶棺：身（口縁部凸帯に斜格子タタキ，体部は斜格子タタキのあとハケ目，体部厚さ3.6cm）	須恵器（杯，壺，甕）		亀田1997c
天堤窯跡	瀬戸内市邑久町尻海	６世紀末～８世紀前半	詳細不明。	６世紀末～７世紀前半の須恵器杯類と７世紀末～８世紀前半の須恵器杯類，時期不明の壺・甕	陶棺は時實黙水採集品で，牛窓町歴史民俗資料館保管とある。須恵器は左記のように２時期のものがある。	西川・間壁1970，伊藤1982，亀田2006c
新山２号窯跡	瀬戸内市邑久町尻海	６世紀末～７世紀前半	直径１cm弱の小円孔が７個開いた厚さ１～２cmほどのナデ仕上げの板状破片（縦横約14cm）と，蓋の可能性がある破片が各１点あるが，体部の厚さが薄く，詳細不明。邑久窯跡群出土の陶棺と異なる特徴。	須恵器（杯，高杯，鉢，台付椀，瓶，平瓶，壺，甕）	板状破片の厚さが１～２cmと薄く，気になるが，赤磐市岩田８号墳の異形陶棺は厚さが約２cmであり，陶棺の可能性も否定できない（神原1976）。	亀田2006b
庄田工田窯跡	瀬戸内市邑久町庄田	８世紀前半	陶棺が採集されているとあるが，詳細不明。	須恵器（杯，壺，甕）		亀田2006e
新林（宮嶋）窯跡	瀬戸内市邑久町尻海	７世紀前半～８世紀前半	須恵質寄棟（四注）家形陶棺：屋根（幅70cm，身と重なる部分の幅は約55cm。棟は格子タタキ，屋根はヘラケズリ・ナデ，他は基本的にナデ。厚さ約3.5cm）。「大」。	須恵器（杯・高杯・鉢・台付椀・瓶・平瓶・横瓶・把手付大型平鉢・壺・甕），鴟尾	操業は７世紀前半から８世紀前半まで継続。地下式登窯。	伊藤1974，亀田2006f
本庄佐井田口遺跡	瀬戸内市邑久町本庄	７世紀？	須恵質切妻家形陶棺：屋根（破片，ヘラケズリ・ヘラナデ）	須恵器	丘陵谷部に須恵器が散布。その畑の石垣に陶棺の破片が挟まっていた。北東約100mの西向き斜面に本庄佐井田口窯跡があり，それとの関係が推測されている。	邑久町2001，邑久町遺跡調査カード
亀ヶ原１号窯跡	瀬戸内市長船町西須恵	７世紀前半	西川文献に「陶棺も焼いていたとみられる」とあるが，詳細不明。	須恵器（杯，甕）		西川・間壁1970，p.299，近藤1955，池田1998e
花尻南窯跡群西須恵2108番地	瀬戸内市長船町西須恵	７世紀～８世紀前半	須恵質切妻家形陶棺？：図３－６（身上部または屋根軒部。ヘラケズリ，ナデ，板ナデ。直径約４mmの小円孔），図３－５（屋根隅部，厚さ1.6cm，凸帯付，ヘラケズリ，ナデ，同心円文）。邑久窯跡群出土の陶棺と異なる特徴。	須恵器（杯，高杯，甕）	図３－６：包含層１点，図３－５：採集１点。	池田1998c
佐山新池１号窯跡	備前市佐山	８世紀	小型家形陶棺か瓦塔か家形骨蔵器の可能性。寄棟か入母屋屋根片２点，身部１点。板ナデ・指ナデ。厚さ約1.5cm。「小」。	須恵器（杯，高杯，皿，把手付大型平底鉢，平瓶，甑，壺，甕），瓦	灰原出土。	亀田ほか2014
大城池窯跡	備前市佐山	詳細不明	詳細不明。		岡山県遺跡分布調査カード。	伊藤1982
大城谷北窯跡	備前市佐山	７世紀末～８世紀初め	須恵質切妻家形陶棺：屋根妻部（幅約36cm，厚さ2.5～３cm，格子タタキ，ヘラケズリ，ハケ目），「中」。	須恵器（杯）	採集。	伊藤1982

［陶棺出土古墳］（備前邑久窯跡群内・周辺地域のみ）

遺跡名	所在地	時期	陶棺の概要	共伴資料	備考	参考文献
寒風古墳	瀬戸内市牛窓町長浜寒風	７世紀末～８世紀前半	石室内から須恵質の陶棺脚２点。水落古墳陶棺を参考にして，長さ約123cm，幅約60cmの須恵質切妻家形陶棺が推測されている。「中？」。	須恵器（杯，壺，甕），鴟尾Ｂ類	直径約７ｍの円墳。無袖横穴式石室（長さ3.3m，幅0.93～1.10m，床面に須恵器甕片を敷く），閉塞部にＢ類鴟尾片を利用。窯壁片？	瀬戸内市2009
中山古墳	瀬戸内市牛窓町長浜中山		須恵質。		無袖横穴式石室。	瀬戸内市2009
吹尾谷の西	瀬戸内市牛窓町牛窓		須恵質切妻家形陶棺：身（２分割，長さ63cm，幅48cm，復元長126m），脚３列３本（×２）。			村上1980，間壁1982a
水落古墳	瀬戸内市邑久町本庄	７世紀？	須恵質切妻家形陶棺：蓋妻部と身小口部に「南」ヘラ書き，板状工具によるナデ。身上部長80cm，幅35cm，蓋長84cm，幅46cm，総高58cm。脚３列５本：計15本，ロクロ使用で直径13cm前後，深さ約10cmの鉢状のものを身に貼り付け。一部須恵質であるが，全体に軟質焼成。	鉄釘か鉄鏃片	横穴式石室墳，骨蔵器として使用？	亀田2006a
サザラシ１号墳	瀬戸内市邑久町尻海	７世紀	須恵質切妻家形陶棺:屋根(斜格子タタキ)。		一辺約15mの方墳，長さ約6.5m，幅約1.4mの無袖横穴式石室。墳丘上面で採集。	亀田2006b
尻海七郎衛門古墳	瀬戸内市邑久町本庄	７世紀？	墓地内で陶棺の脚部出土。	墓地内で須恵器甕片	消滅。	邑久町2001
山手真徳	瀬戸内市邑久町山手		須恵質？		横穴式石室。	間壁1982a
山手１	瀬戸内市邑久町山手		須恵質。		直径10mの円墳。	村上1980
山手２	瀬戸内市邑久町山手		土師質。		直径７ｍの円墳。	村上1980
本坊山古墳（山崎７号墳）	瀬戸内市長船町東須恵	７世紀末～８世紀前半	須恵質切妻家形陶棺：２分割，身小口部に複弁蓮華文を２個飾る。屋根・身ともに基本的にナデ仕上げ，内面に格子タタキが一部残る。脚３列４本×２：計24本。屋根：全長176cm，幅54.6～56.4cm，身を含めた総高約85cm。		約13×11ｍの方墳，無袖横穴式石室（幅約１ｍ，現長４ｍ），東京国立博物館蔵。	亀田・大谷1998
小松谷古墳	瀬戸内市長船町東須恵		土師？，須恵質？，箱形組合。			村上1980，「吉備考古」38
桂山十二ヶ畝５号墳	瀬戸内市長船町西須恵	８世紀初	須恵質切妻家形陶棺：２分割，身全長167cm，幅50cm，高さ38cm，脚２列３本×２：計12本，内外面ヘラケズリ（？），タタキなどは見えない。	須恵器（杯蓋，高台付杯，長頸壺，高杯），窯壁片	約7.5×約6.5mの方墳，無袖横穴式石室（長さ約４ｍ，幅約1.1m）。	池田1998a
西山・札崎２号墳	瀬戸内市長船町西須恵	７～８世紀	須恵質家形陶棺：屋根（格子タタキ）・脚・身部片。		直径約６ｍの円墳，横穴式石室（長約3.5m）。３号墳で陶棺の脚出土とあるが，詳細不明。	亀田1998c
西山・札崎６号墳	瀬戸内市長船町西須恵	７～８世紀	須恵質陶棺：身～脚部（格子タタキ）。			亀田1998c
札崎1518番地	瀬戸内市長船町西須恵	７～８世紀	陶棺	須恵器長頸壺，鉄刀	東京国立博物館蔵。	亀田1998c
亀ヶ原７号墳	瀬戸内市長船町西須恵	７～８世紀	須恵質陶棺：屋根と身（外面：斜格子タタキ+ハケ目，内面に同心円文，屋根内面は同心円文，ヘラケズリ），脚円筒（ロクロ成形）。いずれも堅緻。		直径約8.5ｍの円墳，無袖横穴式石室（長約5.4m，幅約0.7m）。	池田1998b
亀ヶ原10号墳	瀬戸内市長船町西須恵	８世紀	須恵質陶棺：屋根か身か不明。木目に直交する平行タタキ，カキ目？，いずれも堅緻。	８世紀の須恵器杯蓋，甕片	一辺約10mの方墳？，無袖横穴式石室（長さ約８ｍ，幅約1.0～1.2m）。	池田1998b
亀ヶ原21号墳	瀬戸内市長船町西須恵	７～８世紀	須恵質陶棺:身？(斜格子タタキ,同心円文)		直径約10mの円墳，無袖横穴式石室？（長さ約2.8m，幅0.5～0.6m）。	池田1998b
亀ヶ原22号墳	瀬戸内市長船町西須恵	７世紀末～８世紀前半	須恵質陶棺：屋根（外面：平行タタキ，内面:ヘラケズリ），身（外面:斜格子タタキ，内面：同心円文），脚：ロクロ円筒，いずれも堅い。	須恵器（長頸壺・𤮔）	直径約16.5mの円墳，無袖横穴式石室（長さ約5.3m，幅約１ｍ）。	池田1998b
亀ヶ原23号墳	瀬戸内市長船町西須恵	７～８世紀？	須恵質陶棺：２分割，身底部（外面と切断面：斜格子タタキ，内面：同心円文），内法幅38cm。ほかの破片で外面に無文当て具痕跡と思われるものがある。		直径約9.3mの円墳，無袖横穴式石室。	池田1998b

亀ヶ原24号墳	瀬戸内市長船町西須恵	７～８世紀？	須恵質陶棺：身上部（外面：平行タタキ）。		直径約9.5mの円墳，無袖横穴式石室（長さ約3.7m，幅約0.9m）。	池田1998b
亀ヶ原25号墳	瀬戸内市長船町西須恵	７～８世紀？	須恵質陶棺：身底部（外幅46cm，脚３列）。		円墳，無袖横穴式石室（長さ約３m，幅約0.6m）。	池田1998b
釜ヶ原（亀ヶ原）	瀬戸内市長船町西須恵		須恵質：大？		横穴式石室。	間壁1982a
亀ヶ原	瀬戸内市長船町西須恵		須恵質：大？		横穴式石室（長さ７m，幅1.2m）。	間壁1982a
尻無	瀬戸内市長船町西須恵		須恵質切妻陶棺：大，２分割。		横穴式石室（長さ5.5m，幅１m）。	間壁1982a
亥子田	瀬戸内市長船町西須恵		須恵質：大？		永山1930, p.266に「亥の子田古墳」「もと９基現存５，陶棺多し」とある。	永山1930，間壁1982a
西須恵宮ノ尻出土異形陶棺	瀬戸内市長船町西須恵	８世紀前半？	下端一辺約48cmの正方形，上部にアーチ形の屋根，総高約80cm。外面ハケ目，内面同心円文とナデ。骨蔵器？		1941年，広高山西側中腹の美和神社の参道付近で発見。	間壁1981，亀田1998d
西谷１号墳	瀬戸内市長船町西須恵		陶棺片。		直径約12mの円墳，横穴式石室（長さ約４m，幅１～1.5m）。村上1980に「西谷古墳」があるが，同一かどうかは不明。	村上1980，長船町1987
蟋４号墳	瀬戸内市長船町土師	６世紀末～７世紀	土師質，厚さ4.6cm，ナデ，タガなし。		直径約12mの円墳。右片袖横穴式石室（玄室長約４m，幅1.7m，石室全長約5.6m），石棚古墳。	亀田1998b
牛文茶臼山付近	瀬戸内市長船町牛文	８世紀	須恵質？小型切妻家形陶棺。			間壁夫妻1981-28
多聞寺の墳址	瀬戸内市長船町牛文				大規模な石室があり，陶棺を蔵したとある。永山1930には「大字文込向山, 同上十二ヶ谷」とあるが，現在は牛文に多聞寺集落があり，上記の間壁1981-28と同じか？	永山1930，p.267
磯上	瀬戸内市長船町磯上	８世紀前半	須恵質寄棟陶棺：身（長さ84cm，幅42cm，脚３列５本：15本），屋根（両方の妻側上部に直径約２cmの円孔），骨蔵器。			若林1892，京都大学1968，間壁夫妻1981
ヤマンドウＡ	瀬戸内市長船町飯井山ノ堂か	８世紀前半	須恵質家形陶棺：身（長さ53cm，小口部に「×」，脚３列４本：12本）		永山1930, p.266に「山の堂古墳３」として，南浦２号墳（石棺：京都国立博物館蔵）が記載されている。	時實1934，間壁夫妻1981-29
ヤマンドウＢ	瀬戸内市長船町飯井山ノ堂か	８世紀前半	須恵質切妻家形陶棺：身（長さ84cm，脚３列５本？，土師質に見える）。			時實1934，間壁夫妻1981-29
片山	瀬戸内市長船町飯井		須恵質？：身（長さ70cm，幅54cm，脚２列４本：８本）			間壁1982a
百町谷古墳	瀬戸内市長船町吹尾谷					村上1980，「吉備考古」20
惣田奥４号墳	備前市佐山	８世紀初	須恵質切妻家形陶棺：身（長76cm，幅29～31.8cm。脚：ロクロ作り円筒形，２列４本：８本），屋根（推定復元幅42～43cm）。陶棺内より火葬人骨。陶棺が初葬。	長頸壺，杯身，窯壁。追葬品として，８世紀前半の火葬骨入りの須恵器薬壺形短頸壺と皿。	もともと直径６mの円墳？，無袖横穴式石室（長さ3.6m，幅0.95～１m）。	間壁夫妻1982
惣田奥５号墳	備前市佐山		須恵質切妻家形：大		片袖横穴式石室（長さ3.5m，幅0.8m），陶棺が散乱。	間壁1982a
惣田奥８号墳	備前市佐山		須恵質：大？		直径８mの円墳，無袖横穴式石室（長さ４m，幅１m）。	間壁1982a
惣田奥10号墳	備前市佐山		須恵質切妻家形陶棺：大（２分割，長さ120cm以上, 幅60cm), 小（破片, 骨蔵器？）。		直径12mの円墳，無袖横穴式石室（長さ5.2m，幅１m），陶棺が石室内に散乱。	間壁1982a
惣田奥11号墳	備前市佐山		須恵質切妻家形陶棺とされる。		直径10mの円墳，無袖横穴式石室（長さ4.1m，幅0.9～１m）。	岡山県2003b
佐山の古墳	備前市佐山				上記の惣田奥古墳群のいずれかか？	永山1930，p.266
六地蔵北古墳	備前市西片上			須恵器	宅地化で消滅。	村上1980，岡山県2003b
山王山頂古墳	備前市伊部				横穴式石室，瓦棺破片累々。	永山1930，p.264，間壁1982a
片山塚古墳（木の村）	備前市西伊部				横穴式石室（玄室長さ6.0m，幅2.64m，羨道長さ3.3m，幅1.62m）。	永山1930，p.264，村上1980

香登西古墳(仮称)	備前市香登西				稲荷宮境内，昭和22年頃破壊。陶棺出土と伝えあり。	岡山県2003b
新羅古墳	備前市福田		須恵質		土取りで半壊，横穴式石室一部残存。	村上1980，「吉備考古」25
宮ノ峠古墳	備前市福田				横穴式石室。道路拡張で半壊，その後墳丘を破壊。	村上1980
背戸の山古墳	備前市福田		切妻家形陶棺：屋根妻部に瓦当文，長さ２尺５寸（75cm），幅１尺１寸（33cm），脚２列３本：６本	「萬年通寶:760」「神功開寶:765」	詳細不明。	守時1936，間壁1982a
丸山古墳（横穴）	備前市大内					永山1930，p.264
地蔵屋敷	備前市片山		土師質亀甲形？			「吉備考古」25
邑久郷内山奥	岡山市東区邑久郷	８世紀	須恵質小型陶棺：長さ50cm，幅約20cm，脚６本			近藤・角田1956

［鴟尾出土窯跡］

遺跡名	所在地	時期	鴟尾の概要	共伴資料	備考	参考文献
寒風１－Ⅰ号窯跡	瀬戸内市牛窓町長浜	７世紀末～８世紀前半	A類：斜格子タタキ，同心円文，B類：蕨手文，斜格子タタキ。	須恵器(杯,高杯,壺,甕,硯)	焼成部・焚き口部出土。陶棺も焚き口部で出土。	瀬戸内市2009
寒風１－Ⅱ号窯跡	瀬戸内市牛窓町長浜	窯跡の須恵器は７世紀前半～中葉，鴟尾は７世紀末～８世紀前半？	A類が上層で出土。１－Ⅰ号窯跡の製品？	須恵器（杯，高杯，壺，甕，硯），上層埋土で鴟尾A類，方形脚の須恵質家形陶棺	鴟尾は焼成部上層出土であり，時期は不明，７世紀末～８世紀前半？	瀬戸内市2009
寒風１号窯跡群	瀬戸内市牛窓町長浜	７世紀末～８世紀前半	いずれも灰原出土。A類：斜格子タタキ，同心円文，B類：蕨手文，C類：木葉（羽根）文，格子タタキ。		灰原出土。B類が岡山市賞田廃寺で出土（岡山市2005）。	瀬戸内市2009
切明窯跡	瀬戸内市牛窓町長浜・邑久町尻海	７世紀末～８世紀前半	頭部：格子タタキ，同心円文。寒風窯跡群B類頭部と類似（大脇1999，p.61第138図右下）。	須恵器杯類ほか	須恵器は，６世紀末～７世紀前半と７世紀末～８世紀前半の２時期の可能性もあるが，すべて後者の時期の可能性もある。	亀田1997b・2006g
新林（宮畷）窯跡	瀬戸内市邑久町尻海	７世紀末～８世紀前半	C類：木葉（羽根）文。木葉（羽根）文の縦方向中央にヘラで線を引いている。寒風窯跡群出土例にはこのヘラ書き線がなく，細工谷遺跡例にはある。	須恵器（杯，高杯，壺，甕），須恵質寄棟家形陶棺	７世紀前半から８世紀前半まで継続。７世紀末～８世紀前半の鴟尾が大阪市細工谷遺跡へ供給？　地下式登窯？	伊藤1974，亀田2006f
大城谷南窯跡	備前市佐山	７世紀末～８世紀前半	詳細不明。			伊藤1987，p.550

［鴟尾出土寺院］（備前邑久窯跡群内・周辺地域のみ）

遺跡名	所在地	時期	鴟尾の概要	共伴資料	備考	参考文献
服部廃寺	瀬戸内市長船町服部	７世紀末～14世紀初	鴟尾：講堂周辺から７点，西側建物跡から１点出土。講堂周辺の最も大きなものはA類で，外面斜格子タタキ，内面斜格子タタキと同心円文当て具痕跡。２本の凸帯の間に直径約４cmの珠文の剥離痕がみられる。鰭は上のものが高い正段削り出し型である。厚さは３～3.5cm。同文ではないが，寒風１－Ⅰ号窯跡などで比較的類似した特徴を持つもの（A類）が出土している。珠文径が約６cmのものもある。	川原寺式複弁八葉蓮華文軒丸瓦（４種）など７世紀末～平安時代の軒先瓦，行基式丸瓦，玉縁式丸瓦（縄目タタキ），桶巻き作り平瓦，一枚作り平瓦，厚手平瓦，格子タタキ平瓦，平行タタキ平瓦，塼，須恵器（杯，硯，甑，甕），土師器皿，塑像螺髪，フイゴ羽口	寺域の東に接して４世紀の花光寺山古墳。	長船町1997，池田1998f

［鴟尾出土古墳］（備前邑久窯跡群内・周辺地域のみ）

遺跡名	所在地	時期	鴟尾の概要	共伴資料	備考	参考文献
寒風古墳	瀬戸内市牛窓町長浜寒風	７世紀末～８世紀前半	B類：蕨手文，斜格子タタキ。	須恵器（杯，壺，甕），陶棺	直径約７mの円墳。無袖横穴式石室（長さ3.3m，幅0.93～1.10m，床面に須恵器甕片を敷く），閉塞部にB類鴟尾片を利用。窯壁片？	瀬戸内市2009

＊鴟尾の分類は，奈良国立文化財研究所1980と瀬戸内市2009に基本的に従うが，今回はA類は縦帯に円文，鰭部に段型を飾るもの，B類は鰭部に蕨手文を飾るもの，C類は鰭部に木葉文を飾るもの，D類は無文のものとしておく。